

# 彷徨

＜大菩薩より南アルオス＞

18

都立西高校ワンドーフォーゲル部

目次

はじめに	八島久男	一
山行報告(一九六六年度)		二
夏山合宿(一九六六年度)		六
スキー合宿(一九六五年度)		一四
春山合宿(一九六五年度)		一五
個人山行報告		一九
山行総覧		二二
提言		二三
女子部への再考	八島久男	二六
女子部員に望む	梶内俊夫	二七
寄稿集		二九
入部して	古西和夫	二九
入部して五ヶ月	山田優子	二九
御前山	長嶋裕子	三〇
山で嬉しかったこと	松島世志子	三一
夏山の印象	岡入慶一	三一
初めての沢登り	羽柴春実	三二
山	星野敬子	三二
自然・山・人間・機械	早瀬久起	三三
三年間で感じたこと	伊藤義和	三五
女子の山行に考えること	高木彰子	三五
岳友は財産である	田中将利	三六
部員及びO・B名簿		三八

あれはいつのことだったろうか。南アルプスか奥秩父の縦走路を坦々と歩いていたら時だったと思う。そのあまりに坦々とした登山路を見て、何も考えずにいるのは苦のように思えた。かと言って足もとに注意しなければならぬので、景色を見て何か考える訳にもいかなぬ。やむを得ず私の歩いている道のことを考えた。道はまだ途切れることもなく依然として続いていた。うーむ、道か。いつかこんな話をお寺で聞いたことがあった。「君たちがここへ来れたのは道を通ったからだ。だから勉強して人の道を行かねばならない。」だが待てよ、私は今、道があまり立派に整備されすぎているから注意が散漫し、苦にさえ思っているではないか。そうだ、登山道が立派過ぎるのだ。こんな登山道がなければ、一步一歩もって真剣に歩けるはずだ。そうすれば、空虚による苦もないだろう。私の思いはだんだん移って行き、道のことから我部のことへ思いが飛んだ。

我々の今の登山活動はあまりに保護され過ぎているのではないだろうか。あまりに良い先輩諸氏、学校と家庭にはあまりに良く連絡が行き届き理解され、社会的にも認められ、教育行政も心使いしている。何という良い条件なのか。微細に至ればうまいかないこともあるが、大局的に見る限り我々は認められて、否、認められ過ぎているのだ。

私がこゝで認められ過ぎていて、と否定的なことをしばしば用いたのはほかでもなくそれが否定的な結果を産もうとしているからである。我々はこの条件に甘んじて、自ら省みることをしばしば忘れ、何らの理由なくして自らの行為を当然であると解しているのだ。反省というものが、単に形式的になり、自己肯定的となる。以前の山岳部は我々と同様に自己肯定的であったかもしれないが、少なくとももっと創造的であったはずだ。しかも悪条件下にあったので失敗は失敗とごまかされずに現われ、その度に真剣な反省が強いられたことだろう。それに比べ我々は実に安易ではないのか。我々は自ら苦労して思い考えることもせず、自分に与えられた受身としての条件をうのみにし、自ら良い条件を作り出そうという態度に欠けている。そして、……としてという既製の隠れみのに逃げ、自らの怠慢を社会へ責任転嫁している。こういう行為が社会的に、常識的、分相応、道徳的として賛美され、奨励されている。

そう思うと私は私の前にやらねばならない仕事、しかも価値のある仕事山積みされたような感じがしてフアイトが湧いて来た。それにつれていつしか私の歩も速まっていた。

山行報告

一九六五・一九六六

川苔山新入生歓迎会

六五・四

四月十六日(土)

先発隊、氷川四時着。バスの方へ行こうとしたが、中尾何を考えたか歩き出す。仕方なく一時間たって川苔橋へ。例の紙をはる。紙をかき回して来たが、全部使うことにした。紙に書くこと『もうすぐ着くからネ』いやもうウンばかり。日も暮れかかった頃、トテツもないことを言いだす者あり「アレ、去年こんな所を通ったっけ？」「おかしいナア」すでにまっくら。三年生の案内で、やっと塩地谷小屋に着く。十二時すぎても飲みネエ食いネエ。

四月十七日(日)

六時、天気晴。「よかった、よかった」朝食を済ましてから、またマキ集め。昼食の用意をする。川苔偵察では、異常なしとのこと。

O.Bの上遠野氏、梅原氏が来られた。残り飯と塩で4円頂く。カレーの用意も整った頃、新生を出迎えに行く。残りの者で準備を進める。カレーの量が多いので、なかなか混ざらない。

これを見た上遠野氏「オレにやらせろ」と、そばの太い木を、おもむろにつかむと、エンコラかき回す。木の皮、灰などもはいって味も満点。しかし食欲をそそらないのは、なぜか。「しるこ」の方も用意できた。医薬も完備。あとは待つだけ。

十一時二五分、全員小屋に着く。早速昼食。楽しい時間の展開、人数が多かったためか、量はシヨポイ。しかし皆、顔はニコニコ、が腹はペコペコ。食料係「しるこ」でこまかすが、まだモチがきたいので、合唱をして時間をかせぐ。自己紹介も笑いでいっぱい。

十三時半、小屋発。登るのは、昨年と同じところ。しかし昨年より天気が大変よい。ハイキング・ムードに漂いながら進んで行く。

途中、狩をする者一名あり。川苔山頂へ14時50分。八島の見事を説明ぶりに、三年O.Bの間から驚きの声がかかる。新入生は尊敬の日差しで、彼のステキなヒゲ(顔ではない)を見つめて聞きほれる。すばらしい光景に、皆気に入った様子。記念写真を撮る。全員の新入生のを、さて二年生の番「フィルムないよ。」

十五時十九分、頂上出発。静かに、そしてずっと足音が続く。「この中の一年生が、はたして何人ついて来てくれるだろうか。そして来年の新入生歓迎会には、また新しい一年が……」

いや、去年の我々だって上の代の人から……。と、いろいろ考えていると、「キヤハハ」ケラケラ。「後方で三年生の笑い声が響く。途中登って来る人と出合う。「ウヒヤ、こんにちは」中には御丁寧にな人数を数える人もいる。総勢五七名。こっちはぐぐらいた。誰かすべったらしい。後の笑い声が、また高くなつた。一年でなく三年、O.Bの歓迎会のようにある。あとは、ただ足を動かすだけ、どんどん進んで行くと、人家が見えて来た。この楽しい山行も、もう終りに近づいた。が気をぬいてはだめ。十七時、鳩の巣駅着。

(永井 記)

コースタイム

四月一七日 七一〇立川七一五―八三〇氷川八四〇―一九〇〇川乗橋九一―一〇三六百尋の滝一〇五一―一二五塩地谷小屋一三三〇―一四五〇川乗山一五一九―一七〇〇鳩ノ巣一七一七―一八二四立川

参加者

一年 二六名 二年 一四名 三年 七名 OB・先生 一〇名

五月公式山行

(雲取山・御前山)

男 子

六五・五

五月七日 十七時鴨沢発、雨の中を小袖に向かう。荷物は一年が十二〜十四キロ、二年十八〜二十キロ。一年にとっては十四キロでも重荷になる。小袖乗越で雲取への道とわかれ、なだらかな道を三十分程で小袖部落に着き、小袖キャンブ場に幕営。そこは思いのほかに狭く、我々のテント五張と既にあった二張を渡員である。一人につき三十円とられた。雨が降っていたのでテント内で食事をして、九時過ぎに就寝。  
五月八日 三時五十分起床。雨がまだ降っている。朝食、パツクをすませ、六時半出発。

まず部落内の神社まで戻り、一頭張して尾根の道に出た。一ピツチ目あたりで雨が止み、堂所を過ぎると青空が拡がってきた。この頃になると坂が急になり、皆バテてきた。掛声をかけて頑張る。七ツ石山への分岐を過ぎ、巻道をとばしてブナ坂に至る。  
ブナ坂でキスリングを並べ、OBの宮武さんに荷物番をお願いして、サブザツクで雲取山に向かう。すっかり晴れあがって、富士山が美しい。軽快にとばし十時過ぎ山頂に立つ。展望は素晴らしい。奥多摩、奥秩父の山々が一望のもとに見渡せる。ゆっくり昼食のパンを食べ、皆で記念撮影して出発した。  
五月七日 鴨沢一七〇二―一八一五幕営地  
五月八日 起床三五〇―発六二二―九〇五  
ブナ坂九一五―一〇一五雲取山一三三―一三三  
ナ坂一二〇〇―一五一五中日原

参加者

一年 十八名 二年 八名 三年 三名  
先生 小林先生 OB 宮武氏

女 子

五月七日 十七時鴨沢発、雨の中を小袖に向かう。荷物は一年が十二〜十四キロ、二年十八〜二十キロ。一年にとっては十四キロでも重荷になる。小袖乗越で雲取への道とわかれ、なだらかな道を三十分程で小袖部落に着き、小袖キャンブ場に幕営。そこは思いのほかに狭く、我々のテント五張と既にあった二張を渡員である。一人につき三十円とられた。雨が降っていたのでテント内で食事をして、九時過ぎに就寝。  
五月八日 三時五十分起床。雨がまだ降っている。朝食、パツクをすませ、六時半出発。  
まず部落内の神社まで戻り、一頭張して尾根の道に出た。一ピツチ目あたりで雨が止み、堂所を過ぎると青空が拡がってきた。この頃になると坂が急になり、皆バテてきた。掛声をかけて頑張る。七ツ石山への分岐を過ぎ、巻道をとばしてブナ坂に至る。  
ブナ坂でキスリングを並べ、OBの宮武さんに荷物番をお願いして、サブザツクで雲取山に向かう。すっかり晴れあがって、富士山が美しい。軽快にとばし十時過ぎ山頂に立つ。展望は素晴らしい。奥多摩、奥秩父の山々が一望のもとに見渡せる。ゆっくり昼食のパンを食べ、皆で記念撮影して出発した。  
五月七日 鴨沢一七〇二―一八一五幕営地  
五月八日 起床三五〇―発六二二―九〇五  
ブナ坂九一五―一〇一五雲取山一三三―一三三  
ナ坂一二〇〇―一五一五中日原  
五月七日 鴨沢一七〇二―一八一五幕営地  
五月八日 起床三五〇―発六二二―九〇五  
ブナ坂九一五―一〇一五雲取山一三三―一三三  
ナ坂一二〇〇―一五一五中日原

く、かなり荒れていた。もうすぐ昼食とい

ところ、Nさんが貧血を起こした。幸い軽

かつた。少し休んでから三年生についてもら

う。木の蔭で昼食。昼食の時はやんでいた雨

も、歩き出すと又こやみなく降り始めた。一

ピツチで御前山に着く。この間もやぶがすこ

かつた。記念撮影の後、頂上に別れをつける。

下りの予定は鋸山からの道だつたが、又もや

間違え、鞆口山を巻いたすぐ後で下り始めて

しまった。途中で大ダワの下りと出合う沢ま

で下り、その後は順調に下つた。皮肉にも氷

川駅に着いたのはコースタイムにほとんど同

じであつた。

### 六月公式山行

(小金沢連嶺・鷹の巣)

六五・六

女子

一時半、みんな元気に学校出発。土曜日の

為、電車はかなり混んでいた。氷川駅に着い

た頃、かなりひどい雨が降っていた。バスに

乗ること四十五分。この間気分が悪くなつた

人が二、三人。終点に着く。依然雨はこやみ

なく降っている。さつそく日原川の河原の幕

営地へ。テントを張り終えた頃、雨が再び激

しくなつた。O・B到着。夕食準備。ご飯を

おいしく炊くのに一生懸命。てんやわんやの

のち、まあまあのできで、二年はホッ。夕食

後個人プレーを食べ歌を歌う。テント生活初

気。川を幾度か渡りシグザグの急な登りを

くり返して鞆口のクビレに着く。そして昼

食の待つ巴ノ戸の大クビレへ。巻き道でほ

とんど傾斜はないのだが、意外に長かつた。

昼食。カンバンに慣れた一年の食欲はすさ

ましい。夏ミカンがとてもおいしかつた。

昼食後、荷物を置いて鷹ノ巣山へ。途中一

年が一人遅れたが二十分ちよつとで頂上に

着く。霧の為、何も見えない。もと来た道

を下る。一ピツチで七ツ石山まで行く。か

なり速いペースだつた。七ツ石山への登り

がずい分きつかつた。ファイトをかけて登

る。みんなよくがんばつた。頂上で汗をぬ

ぐい飴をなめて元気をつける。そして一気

に鴨沢まで下つた。昨日の雨でかなり道が

悪かつたが、幸いころぶ人もいなかつた。

鴨沢についてバスを待つている時のみんな

の顔はかなり疲れているように見えた。立

川に戻つたのは、ほとんど七時半に近かつ

### コースタイム

五月十五日 立川七〇四一七四五日市一

八二一八五〇大沢九〇三一一二一〇昼食一

三〇〇一四一〇御前山一四二五一一六五五

氷川一七〇七一八二二立川

### 参加者

O高木 佐久間 西村 中井 星野 羽柴

三枝 稲葉 岩井 山田 相沢 入戸野 長

嶋 石井先生 O B梶内

### コースタイム

六月一日 立川一四四一―一六三六氷

川一七五五鐘乳洞一七三〇幕营地

六月二日 発七〇八一登山口七三三一

七三八巴ノ戸橋一〇〇五鞆口のクビレ一

〇一五〇一〇大クビレ一二二〇〇一二二四  
 五隴ノ巢二五五一大クビレ一三三〇一四三三  
 七七石一四五〇一六四一袖乗越一六  
 五九嶋沢一七二六一八〇五氷川一八一四  
 参加者

〇工高木 佐久間 西村 中井 星野 羽柴  
 三枝 稲葉 岩井 山田 相沢 入戸野 長  
 嶋 藤田 松島 尾形先生 〇B 堀内

男 子

例の如く立川集合。氷川まで電車で行き、  
 バスに乗り換え小菅へ。体操をすませザツク  
 を背負う。赤沢までは何という事のない幅広  
 いトラック道を行く。赤沢で夕飯。陽も落ち  
 寒くなつてきたので予定より早く出発する。  
 ここからは山道でもあり暗いので懐中電灯を  
 出す。夜の山道はまつたくすばらしい。鳥の  
 声とそよ風がかすかな音楽をかき立てる。後を  
 見ると懐電の光が一行となりちらちらして幻  
 影のようだ。ファイトの掛声と全員の呼吸だ  
 けが静寂を破る。少し歩いて一年が一人ばて  
 始めた。たいして急な上りでもないのに、二  
 年生が声を出して元気をつけると、その甲斐  
 あつてか幕営地近くなつて調子がでてきたよ  
 うである。フルコンパに着きすぐに幕営。着

いたのが遅いので幕営し終るとせつかくの星  
 空も見ずに毛布にもぐる。

四時二十分起床。夏至の日に近いためにあ  
 たりはもう薄明りがさしている。朝飯のプレ  
 ーストプは名だけ、水分が足りずあまり食え  
 なかつた者もいた。準備を終え出発。間もな  
 く夜行列車で来た〇Bの小川氏に会つた。峠  
 には三十分程で着いた。林を過ぎ広々とした  
 草原状の所を下ると石丸峠である。一つピー  
 クを越えて休憩し、ここからは倒木が多いの  
 で隊を二つに分け五分程間をあけて出発させ  
 る。この頃からまた遅れる者がでた。ガンバ  
 レはガンバレるよ。小金沢山を通過し昼食予  
 定の牛奥雁が腹摺山まで一年は上級生にどな  
 られながらも着く。南アルプス、富士山など  
 が雪を白く残して見える。雨を予定していた  
 我々は意外な天気大喜び。黒岳は一等三角  
 点なのだが見晴しは全くよくない。湯の沢峠  
 まで急な下りである。ここから沢に沿つて橋  
 を渡り返しながら木馬道を下りトラック道に  
 出た。それから少しして一年が一人めまいと  
 腹痛で倒れてしまい、気を失なつたので〇B  
 と一諸にトラックで駅へ行かせた。他の一年  
 も暑さで大分参つているようなので駅まで小  
 一時間の所を二回も休ませて初鹿野に着いた。

コースタイム

六月二五日 小菅一八〇〇一〇一九一七赤沢  
 一九五五一一二四五フルコンパ

六月二六日 起床四二〇一発六四五大菩  
 薩峠七一七一九三五牛奥雁が腹摺山一〇二五  
 一〇二〇二湯の沢峠二二〇一二五五初鹿野

参加者

一年 十五名 二年 八名 三年 一名  
 先生 間野先生 〇B 小川氏 山本氏

G  
S  
I  
P

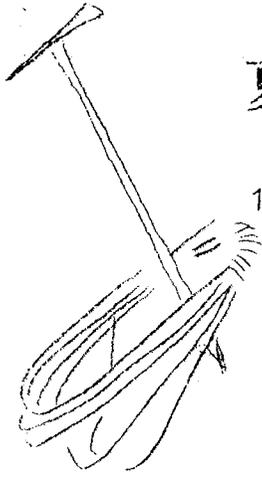
二年部員解説①

A君。彼は、クラブにおいては貴重な存在  
 である。彼の役割は、その底ぬけの記憶力に  
 よる医学的知識で、我々の世話をしてくれて  
 いて、(彼の活動範囲は広い。内科、外科、  
 小児科、ひいては産婦人科まで)またユーモ  
 ラスな話題のメーカーでもある。



# 宿 合 山 夏

1966.7~8



男子 剣、立山

女子 常念、奥穂高

男 子

四月から我々の間では、夏山は剣岳という意見が強かった。何回か討論し考え結局剣岳立山という案が決定した。六月山行を終えると夏山が急に近づいたような気がしてあせつたが準備は一向にはかどらない。それでも試験休みに入つて本格的な準備が始まつた。夏の暑い一日は緊張し続けるには長過ぎる。頭の回転は極度ににぶる。周囲から何だかんだと言われながらついに出発の日が来た。

七月二十五日夜行で新宿を発つ。寝られる者あり寝られぬ者あり。翌早朝大町に到着す。マイクロバスをチャーターして扇沢へ向かい、ねむい目をこすりながら眺める北アルプスの山々は朝日を受けて黄金色だ。扇沢からトロリーバスで大町トンネルを十五分、黒四ダムへ。周囲の山々が大きすぎるので日本のダムもさほど大きくない。立山は雪を頂きはるかに高い。黒部の谷は切り立つた兩岸の奥底に秘められている。秩父多摩の山々と違つた何かを感じ、闘志と不安で胸がいつばいになる。谷に降り立つて下流へ行くとOBの上遠野さんに会いみんなニッコリ。

ち込み水しぶきが涼しさをさそう。野崎さんの六〇〇円のスイカと二年女子諸君の四〇〇円のスイカをありがたく頂く。どちらがうまかつたかは御想像にお任せしよう。内蔵助平までの上りは相行きつい。睡眠不足と肩の重荷が歩をにぶらせる。とうとう二年の目君が遅れてしまつた。この合宿最初で最後の遅れた者となつた。

予定より一時間も早く幕営地に到着、幕営後しばし清流にこいを取る。食事をすませるとすぐに寝る用意。一番早いテントは五時半に「お休みなさい。」

七月二十七日、食当テントは二時半に起きる。OBから今日のコースがきびしいことを聞かされていたので、ねむいながらも緊張する。予定通り出発。川底のような道がくねくねと続き、目ざすハシゴ谷乗越は容易に近づかない。ようやく乗越の上に立ち、初めて仰ぎ見る剣岳の偉様は、我々の若き血を煮えたぎらせるにそれだけで充分であつた。正面のマイナー・ピークはそれが前衛峰であるとは思えないほど大きく、それから察するに剣なる山は余程偉大なのである。目を南に転ずれば、立山の峰々がなおも高い。その山懐に抱れた内蔵助平は不思議なくらい平らな樹海をなし

ている。その向こうにも山々がそびえていた。再びザツクを背負つて歩き出す。目は山の峰々から離れ足元に注がれる。やがて雪溪歩きが始まり、下からO Bの応援隊の声がした。O Bの言によれば、数日前に比べて予想外に状態が良くなつたとのこと。そのためだろるか予想外の好調さでハンゴ谷出合まで下る。

剣沢の雪溪はこまめでないので右岸を高巻きながら真砂沢出合のO Bの幕営地まで遡る。雪融けの冷たい水に喉を潤し、昼食のフランスポンとレモンにかじりつく。長大な剣沢雪遡―これが最初の難関である―が我々を待ち構えていた。昼食を終えて我々がここに足を踏み込むと、雪の上を渡るさわやかな風が我々を迎えてくれた。その開けた明るい雰囲気は一歩一歩が確実なものとなる。長次郎、平蔵、竹蔵の雪溪を見上げいつの日かここをグリセードで下ることを思いながら登る。周囲を見渡すともうハイハツの領域に入つていた。二時前に幕営地に着く。全てが快調だつた。試練の日を明後日にゆずつて一日が終つた。

七月二八日 準備に手間取り出発は六時、ザツクの重荷から解放されたみんなは勇む心に足どりも軽く剣岳へ向つた。前剣に難なく到着。剣沢、立山方面が美しい。遠く白山も

見える。一息入れてまた出発。平蔵谷のコルからの岩場はちよつとこたえる。バランスの悪い者、リズム感のない者、高度感に恐怖を感じる者などもたまたまする者あり。四点確保じや動けないよ。

九時剣岳山頂到着、日本最北端の三千米峰。帽子の雪溪で昼食を取る。正面後立山連峰。空は底なしに青く、雪は白く冷たい。雪のシヤ―ベツトを食べ、食べ空を見上げる。はるか下の源次郎II峰を下る人が見える。言語の普遍性はこの時の我々の感激を表わすのに向いていない。何も言ひない。

頂上で記念撮影後、剣を下る。有名なカニの横這いに一瞬ひやり、だが確実なホルドをつかんだ時は気分が良い。昼近くになるとどこからへもなく雲が湧き出る。

一時過ぎ幕営地に帰る。夕食を早めに終えて雪溪の水で食器を洗い明朝のために水を汲みおく。雪融け水が冷めたくて苦労したことあつたつけ。夕陽に赤く染まる剣岳。今日我々の登つた剣岳。見る剣は美しいが登る剣は恐しい。何か仲間と話したい気持だが一人ノ―トに書きとめて寝る。

七月二九日 今日立山縦走、できる限り早く出発。歩き出すとすぐに明るくなつたが

太陽は見えない。御前小屋に着いてみると、西風が強く雲を吹き上げていた。小屋かげに一服。さてこれから立山の縦走になる。別山乗越を過ぎると左手にじつと動かない雷鳥の姿があつた。こんな霧の日にはよく見かけるそうだ。

吹き上げる霧のため暑さを感じない。視界も悪いので夏山の縦走という感じがしない。全く予想はずれの天気で、バテるはずのところまでバテない。平らの縦走路を行くうちに真砂岳を過ぎ、やがて富士の折立の登りになる。が、一歩一歩確実に登ると富士の折立に立つ。ここで記念写真を撮つて、O Bの小川さんと別れる。大汝山、雄山も難なく過ぎ、一の越で軽食を取る。浄土山も大した登りではなかつた。好調な足どりで五色が原に向う。途中昼食を手早く取つて、雷鳥に元気づけられながらまた歩を進める。

十一時半、五色が原に到着。素晴らしい幕営地を見つけ幕営を始めた時、まだ正午を回つていなかつた。落伍者が出て予定が狂うのを心配していた我々にとつて考えもしなかつた結果だつた。どうにも快調過ぎたのである。

雪溪から吹きおろすガスが我々を包んだり、また太陽の顔がのぞいたりする幻想的な景色

気の中で、我々はテント内で楽しい一ときを  
過した。夕飯の準備にとりかかつた頃、やつ  
とO Bが現われた。夕げの一ときもまた楽し  
かつた。シナノキンバイやコバイケイソウの  
生えた草原に歌声が響き、笑い声が聞えた。  
明日向かう針の木方面を雲間に見ながら安ら  
かな眠りの途についた。

七月三十日 夜が明けてみると空は晴れ後  
立山から北ア南部の山々まで見えた。出発し  
て間もなく平らな展望台に立つて北アルプス  
の山々を一年生に説明した。白馬から針の木、  
裏銀から槍へ、遠くの笠が岳手前の黒部源流  
の山々。また五色が原が深く印象づけられた。  
樹林帯に入つてぐんぐん高度を下げる。黒  
部湖の碧水がみるみる近づく。潮水も近くな  
ると広葉樹もあらわれて奥秩父の静かな山道  
を思い出させる。平小屋には二ピッチで着い  
た。だが渡し船は十時にならないと出帆しな  
い。しかたなくゆつくりと食事を取つて渡し  
を持つ。

くろよん丸に十人づつ分乗し、右岸に渡る。  
ここから長い針の木谷に沿つて進む。南沢出  
合を過ぎる頃からしばしば道を見失ない、川  
原のケルンを見つけては先へ進む。広い川原  
でひと休み、三年生のさし入れのモモの罐詰

めを食べる。もう一息。二時前に二股に着き  
幕営地を探す。これより先は幕営地がなさそ  
うなのでここに幕営することにした。

しばらくしてO Bが追いつき、針の木峠か  
ら山本さんが来た。山本さんの話によると針  
の木の雪渓は雪が多く、現役だけでは無理と  
のこと。このやむを得ない事情のため明日下  
山することになった。今まであまりに好調だ  
つたので、明日下山とはいかにももの足りな  
い。そうと決まつたら今夜の夕飯は豪華にし  
よう。ミン汁にはありつたけの材料を使い、  
ベーコンをいためて食べる。この結果食料は  
安くて軽くてうまいとほめられることになつ  
た。食料係はほつとした。

七月三十一日 朝食を取つていると雨が降  
り出した。雨は次第に強くなり出発を見合せ  
る。テント二張は増水の危険に侵されそうに  
なつたので徹夜し、残りのテントで待機する。  
テント内で天気図を取り今日の行動を検討し  
ていると、テントの壁に奇妙な影が映つた。

ありや何だ。よくみると川のサンショウウオ  
がテントに這い上がったという訳。この珍事  
件に我々の不安な心がしばしば慰められた。  
昼になつて雨足も弱まり雲の切れ間に青空  
が見られるようになったので、緊急に出発を

決定、徹夜を始める。しよほふる雨の中をO  
Bに見送られて正午過ぎ幕営地を発つ。二時  
間二ピッチで針の木峠へ出る。針の木の雪渓  
はまだ立派に残り峠付近は少々急である。O  
B数名の指導のもとに一歩一歩ステップを切  
りながら雪渓を下る。雪渓の傾斜がゆるくな  
る所で、ここまで送つてくださつたO B諸氏  
に別れ告げ一路扇沢へ急いだ。その日の夜行  
で帰京。

八月二日 反省会が開かれた。一年も二年  
も三年もO Bもみんなあまりに好調だつたこ  
とを思い、物足りなさど不安が現つた。その  
裏には食料計画に於ける重量主義か軽量主義  
かの問題、燃料の予備の量に關する問題が隠  
されているのだ。そして一年の重荷に耐える  
能力もまだ未知数なのだ。

最後にわざわざ仕事を休んで我々の指導を  
して下さつた橋本章さんをはじめO Bの方々  
に深く感謝していることを加えたい。

#### コースタイム

七月二十六日 黒四ダム八三七一〇〇〇内蔵  
助谷出合一一〇〇一三二七内蔵助平  
二七日 起床二三〇一発五二八一七二七ハン  
ゴ段乗越七三二一剣沢出合九〇〇一九五〇真

砂沢合合一〇四五、平蔵谷合合一二〇〇、一  
三三七、剣沢三田平

二八日 起床三三五、発六〇〇、一七二〇前  
二〇一九〇〇、剣岳山頂一〇三〇、一前、剣一二  
一五、一三一、五、剣沢三田平

二〇日 起床二〇〇、一、発四二〇、一、五〇五御前  
小屋五、一、五、一、六、四、三、富士折立六、五、一、七、五〇  
一、起八、二〇、一、九、五〇、獅子岳一〇二〇、一、一、一、三  
〇、五色が原

三〇日 起床三〇〇、一、発六〇〇、一、七、五、五、平小  
屋一〇、一〇、一、一、三、五、五、二、股

三一日 起床三〇〇、一、午前中雨のため停滞  
発一、二〇、五、一、一、四、一、三、針の木峠一、四、一、八、一、大  
沢小屋一、六、二、八、一、一、六、五、五、扇沢

使用器具

幕管用具 テント四張 (N〇一四、N〇一五、  
N〇一七、N〇一八) スコップ一本 ツ  
エルト一 テント修理具 ナタ三

燃料関係 ラジウス大六台 小一台 石油一  
二リットル (ラジウス内の外) メタ八

二 ロウソク一二本 ラジウス修理具 ポンプ

炊事用具 食器四八 洗いナベ二 メシナベ  
三 お玉 鮑丁 タワシ 布バケツ ポリ  
袋 ヘラ

その他 目覚し時計 キジペー九 トランジ

スタラジオ 天気図 医薬品 針金

ザイルはOBが持つていった。

食料

	朝食	昼食	夕食
二六	弁当	ブドウパン	カレーライス
二七	ブタ汁・飯	フランスパン	ナス汁・飯
二八	ミソ汁・飯	フランスパン	シチュー・飯
二九	タンメン	カンパン	コーンスープ
三〇	ポタージュ	ガリバルジー	ミネ汁・飯・ ベーコンいた め・ミン
三一	関西おじや	カンパン	自由
停滞	イタリア風	カンパン	ミコンメス
	リゾット	ルク	ブ

注一、停滞は計画だけで実際は作らなかつた。

注二、朝食には漬物等、夕食には麦茶が出る。

注三、昼食にはこの外にジュース(カルピス)レモン、ジャムなどがつく。

参加者

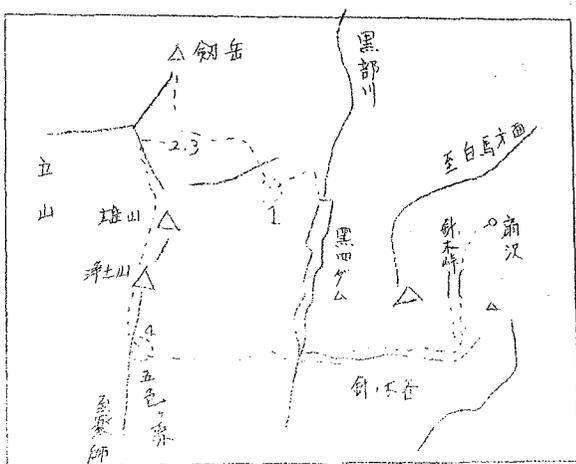
OB 橋本章氏 平木氏(入山のみ)  
三年 (CL) 伊藤 山野

二年 (SL) 八島 中尾 永井 石橋

山本泉 菊池 早瀬久起

一年 水口 伊沢 長谷川 早瀬友秋 岡  
入 渡辺 伊東伸作 古西 和地

剣・立山略図



女子

四月、夏山合宿のコース選定を始める。去年の白馬周辺での合宿が基準だった。五月中旬、六つほど出ていた候補地の中では、常念山脈縦走（大滝―燕）のコースが最も有力だった。女子にとつてそれ程きびしくなく、危険性もない。又大変展望がよく、お花畑があるなど女子に向いているという理由を原因だった。六月、OBから燕まで行くより穂高を加えてはという案が出された。七月、最終的に、今度行なつた須佐渡―常念―蝶―横尾―奥穂往復―上高地に決定。夏休み、連日トレーニング。又去年同様説明会を開き、父兄の方々にコース等について納得して頂いた。今年は今員医師の健康診断をしたが、やり方少し問題が残った。八月、準備も最終段階。器具わけ、食料の梱包等を終え、出発前日パツクも終わつた。荷物は予定オーバーで一年二十二キロ平均、二年二十八キロになつた。OBは五・六月公式山行に来て下さつた堀内さんと、今井さん、田中さん、特に感謝すべきことにOBの平沢さんの奥様がついてきて下さることになつた。後は出発を待つばかり。

八月五日、六日 新宿―一の沢河原

二三時発の急行穂高で新宿を発つ。車中は大変な混みようで、一年の男子が早くから列んでくれた為に坐れたものの、なかなか眠れない。眠つたような眠らないような状態で、早朝の豊科の駅に降りたつた。かすかに霧雨が降つていた。予め頼んでおいた車に分乗する。車の前方の山々の中に、常念岳の優雅な三角形も見える。ファイトが湧いてくる。四十分後、ある小屋の前で車は止まつた。予定した所までは入れなかつた。朝食をとる。天気もよくなつた。遙か遠くに見える常念めざしてさあ出発。背中の荷物がズシリと腰に重く、肩にくいこむ。ゆつくりと一歩一歩進む。汗が額を流れ、そして落ちる。ニピツチ目、ややベースをあげる。小屋の前に出た。あれつと思ふ。一の沢山荘だつた。思つたより快適に來ていることになる。小屋のそばの川で顔を洗う。何とも気持ちがいい。三ピツチ目は一の沢の河原に出る。昼食まであと一ピツチ。昼食はカンパン。皆あまり食べない。食事後幕営地を捜しながらしばらく行く。OB、三年生が先に行つて適当な場所を捜して下さつた。河原と道の境のような所に天幕を張る。車が途中までしか入らなかつたが予定の辺まで來たらしい。キャンプファイアー(?)を

囲んで食事をし、差入れのウリをおいしく食べ、歌を歌い、合宿最初の日も暮れた。川の水は、とても冷たく、澄んでいた。

八月七日 一の沢河原―常念乗越

常念乗越が見える。今日はあそこまで行くのだ。六時半出発。ニピツチ目、一年生の一人在遅れぎみになる。待ちかねている最後の水場がなかなか來ない。オーダーを少し替える。昼食までよく頑張つた。河原で昼食。皆きのうよりよく食べた。昼食後、急に傾斜がきつくなり、河原を離れ、遂に最後の水場に着いた。豊富な水ともここでお別れ。水筒にいつばい水を入れ、いよいよ乗越への最後の登り、胸付八丁と呼ばれる急登にかかる。途中一息いれ、ちようど一時間の登りの末、だだつ広い常念乗越に出た。槍からキレットまでの驚くほど大きな、壮観な眺めが目の中に飛び込んで來た。皆、声もなくただただ見とれていた。テントを張り終えた頃、あたり一面ガスがかかつてきた。やはり稜線は寒い。夕食後カルピスを飲んだり、一年生も一安心したのか、テントの中でおしゃべりも楽しそう。去年の合宿での私達を思い出す。隣りのテントがうるさく皆なかなか寝られなかつた。

八月八日 常念乗越―蝶ヶ岳

今日は行程は長いが、槍穂高の大バノラマを見ながら行ける日である。天気も上々。目の前に大きくどつしりと立ちはだかつている常念へ一歩一歩近づいて行く。石がゴロゴロして登りにくい。常念小屋の赤い屋根が下の方に見えたが、なかなか頂上は遠かつた。頂上も間近になりフアイトを連呼。八時ちようど、石の累々と積み重なつた、祠のある常念の頂上に立つた。槍をバックに全員で記念撮影。二日後に登る奥穂がいやに大きかつた。裏銀座の稜線も見えた。槍穂高の景観はまさに雄大であつた。登りと同じように石のゴロゴロした道を、注意深く下る。全く気を使う下りだつた。せつかく登つたのにこんな下るとは、と嘆きたくなる思ひだつた。

下つたところで昼食にすることにした。今日はチーズがあつた。お花畑で休憩したり、湿地を通り小さな池を見つけたり、槍沢の長い長い道をおろしたりしながら三回ほどの起伏を繰り返して、蝶ヶ岳の頂上は常念とは対称的で、広く平らだつた。蝶ヶ岳ヒュッテが予想より遠くにあり、田中さんが見に行つて下さつた。しばらくして私達も横尾の分岐まで降りた。すでに二時をまわつていた。付近に水はなかつた。今日中に横尾

まで降りるかどうかを相談。結局皆疲れているようなので、予定通りここで幕営をすることにした。這松に囲まれた場所でも幕営。みんな動作がにぶかつた。この場所で幕営は許されていないとヒュッテの人に言われ、一もんちやくあつたが、OBの方々のお蔭でうまくまとまつた。全くよくなかつた。下調べの足りなかつた事など大いに反省すべきだつた。この日今井さんが下山なさつた。

八月九日 蝶ヶ横尾

朝、大滝山の方へ散歩に行く。途中、下山なさる田中さんをみんなで見送る。お花畑にねころんで青い空をみあげ、しばしのんびり幕営地へ戻り、ザックをしょつて横尾へ下つた。梓川の河原にテントを張る。この日の夕方からOBの小川さんが合宿に加わつて下さつた。

八月十日 奥穂往復

今日は空身で奥穂の往復である。屏風岩が恐ろしく切りたつて左に見て、今合宿初めて雪溪を通つて湖沢に着いた。ここで合宿中のOBの方に、穂高の説明などして頂き、奥穂を目差す。湖沢小屋の前を通り、トラパスして、ザイテングラードに取りついた。一時間の急な登りで穂高山荘に到着。空

身のせいほとんど疲れを感じなかつた。遠く霞んで見える常念をみな感慨深く見つめていた。山荘の前で昼食後、隊を三つに分け、頂上に向かう。十一時五十分、OBの方々の待つ頂上に立つた。あいにくガスがかかつて、周囲の展望が全く望めない。ガスの切れ間にジャンダルムが不気味に立ちはだかつて見えた。しかし、三千メートルを越す山に初めて登つたこの感激は大きかつた。湖沢でレモネードをご馳走になり、横尾へ戻つた。今夜は合宿最後の夜。キャンプフアイトこそなかつたが、みんな、しゃべり、食べ、そして歌つた。

八月十一日 横尾―新宿

とうとう合宿も最後の日が来てしまつた。上高地まで二ピッチ。平らな道である。今日は家に帰れると思ふせいか、一年生の足取りも軽い。上高地に着いた。何と人の多いことか。スカート姿が何か奇妙なものに写つた。臨時増発のバスで新島々駅へ。松本で各自、昼食をとり、第四アルプスに乗車した。車中みんな嬉しそう、楽しげに笑つてゐるみんなの日に焼けた顔。それぞれ合宿でいろんなことを学んだらう。今年の夏山合宿もあと数時間で幕をとじようとしている。全員、無事に

帰つてこられた。雨にも降られず、計画どおりに滞りなくやつた。でも私には、何か物足りない気がするのだ。自分達の手で合宿をやり遂げたのだという満足感が湧いてこないのである。いろいろな点に問題があつたと思う。女子部としての二回目の合宿であつた為、もある。しかし今年からは、一・二・三年とも女子部でできた合宿である。今後の合宿のあり方、そして女子部のあり方を、改めて考える必要を感じる、そんな合宿だつた。

コースタイム

- 五日 新宿二三〇〇
- 六日 豊科五三八一六三八大助小屋八一五
- 九二五一沢山荘九三五一一二二幕営地
- 七日 発六二九一一二三〇常念乗越
- 八日 発六〇五一八〇〇常念岳八三五一一
- 三四三蝶ヶ岳一四一〇一一四二〇分岐一四四六幕営地
- 九日 発八一〇一八三二蝶ヶ丘ヒュツテ九三三一九五五幕営地一〇一五一一〇二五分岐一三二五横尾
- 十日 発五二〇一七四六濁沢八〇〇一〇一
- 二五徳高山荘一一一五一一一五〇奥穂高岳一
- 二二〇一一四二三濁沢一五〇五一一六五五幕営地

十一日 発六〇〇一七〇三徳沢園七一〇一七四五分岐一七五五明神池一八三〇上高地九〇〇一〇一四新島々一一二九一一二〇四松本一四三〇一一九 二新宿

参加者

〇L高木 佐久間 西村 S.L中井 星野  
羽柴 三枝 稲葉 岩井 山田 入戸野 長  
嶋 藤田 松島 O.B樫内 今井 田中(康)  
小川(特)平沢美代子

器具一覧

幕営用器具	重量
六人用テント一式	三張
三人用テント一式	一張
張網スベア	二本
スコップ	一個
ナタ	一個
石油コンロ	五個
台皿	四枚
メタ	十三個
石油	十一ℓ
石油用ポリタン	四個
石油用ポンプ	一本
パッキングスベア	二種
マンドリンスベア	六本

炊事用器具

三脚スベア	一本	一・五
ツエルト	一張	一・五
ろりそく	九本	一・五
はり金	一束	一・五
ザイル	一本	五・〇
ラジオ	一	一・五
目覚まし時計	一	一・五
天気図		
カメラ		
団体医薬		三・〇
炊事用器具		
コップエル	二組	三・四
めしなべ	二個	二・六
食器	四二個	一・〇
ほうちよう	四本	一・〇
しゃもじ	二本	一・〇
おたま	二個	一・〇
タワシ	四個	一・〇
クレンザー	一箱	〇・三八
ペーパー	七個	
まな板	二枚	
布パケツ	一個	
総重量		七六・六

(ザイルを除く)

食料計画		朝	昼	夕
11日	飯 味噌汁 ふりかけ	自由	自由	自由
10日	漬物 飯 コンソメ	レモン 自由	番茶 飯 粉末ソーダ 自由	飯 シチュー 番茶 佃煮
9日	漬物 飯 味噌汁	カンパン 自由	たきこみ御 飯 紅茶 プリン	飯 カレー 福神漬
8日	肉の煮つけ 飯 味噌汁 こんぶ汁	チーズ 自由	豚汁 飯 番茶 佃煮	飯 カレー 福神漬
7日	いためもの 飯 味噌汁	カンパン 自由	自由	自由

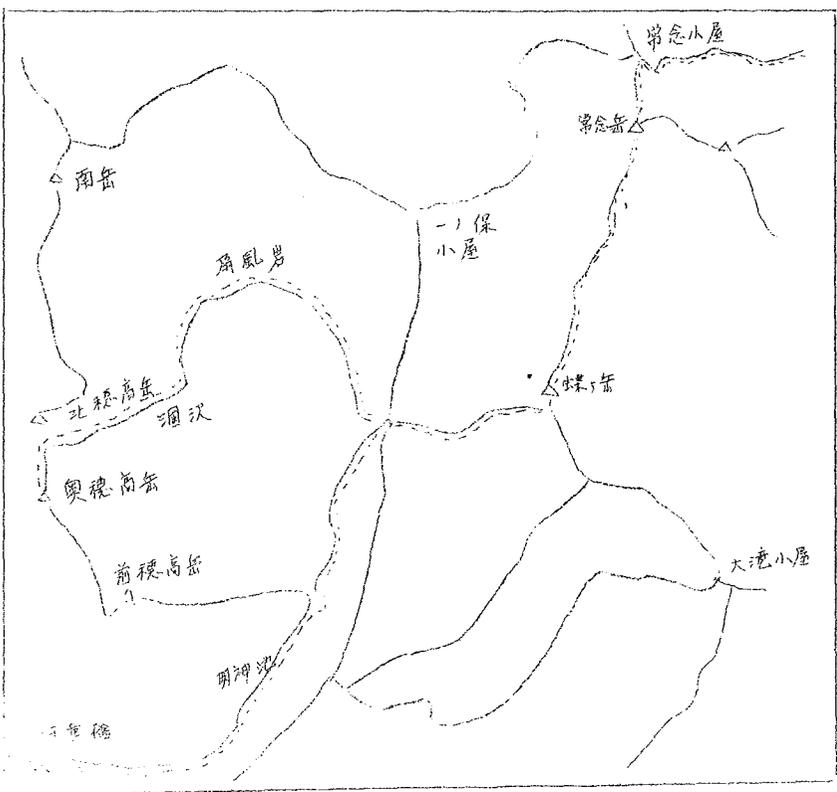
総重量七〇キロ

反省

全体的に下調べが不十分だった。一日目に車が予定地まで入らなかつたこと、蝶ヶ岳の近所のこと等。三日目に予定以上に時間が

かかつたのは、常念岳の下りを甘く見てコースタイムに余裕をみていなかったからである。山行の要衝気作りに関してOBの方々のおうところが多かつたのは、反省すべきである。なお出発前に全員がかりつけの医師に健康診断してもらつたこと  
で、賢臓の悪い人を事前に発見できたのは幸運だつた。  
食料に関しては全体的にあつさりしていたようである。おかげは二品つけたほうがよいという声が高かく朝食にもお茶が欲しかつた。また軽量化には反するが生野菜をもつともつていくべきだつた。今後保存についての研究を行つていきたいと思つている。石油は七〇少々しか使わなかつた。今回は全員が毛布をつかつたが、シユラフを使えば個人装をもつと軽くたが、シユラフをえば個人装をもつと軽くすることができたのではないか。荷物の一部をOBに負担していただいたような現在、研究の余地が多いと思う。

常念・奥穂高略図



▽ スキー合宿

六五・十二

東京にも木枯しが吹き始める頃、我々はスキー合宿の準備に忙がしかつた。スキーヤスキー靴を貸りにO Bの家を回り、装備の点検と修理に一日を暮す日々だつた。いよいよ終業式の翌日、十二月二十六日朝、スキーへの期待に胸をふくらませて上野を発つ。

スキー場は小出からバスで三十分程の大湯スキー場。スキー場としてはあまり条件は良くないが、O Bの越後駒が岳登山の基地にあるためここが選ばれた。男子は冬用テントで幕営、女子は小屋泊りで過す。テントは小屋の運動場とかいり所に張られ、夜は近くの水銀灯が煌々と照つていた。それでもテント生活は楽しいものだ。哲学論議からいかがわしい話まで個人プレーをむさぼり、歌を歌いながら話す。

練習は二七日から始まつた。朝七時に掛けるトリフトはまだ動いていない。我々が最初のお客様である。

経験者と未経験者の二班に分れ、それぞれO Bの指導のもとに基礎的技術から習う。直

滑降、斜滑降、ブルークボーゲン、シテムボーゲン、それに経験者の班はシテムクリスチヤニア、山回りクリスチヤニア等を習う。中にはパラレルクリスチヤニアからウエーデルンまでやる者もいた。

晴れた日は白銀の越後駒が岳が美しかつた。三十一日には我々はこの山へ向かうO Bを送つて帰途に着いた。

この合宿は技術的な成果はそれ程得られなかつたが、雪の中の生活に慣れるという点ではある程度の成果が得られたのではないかと思う。特に食料など重い思いをした甲斐があつて大変おいしいものが食べられた。

参加者

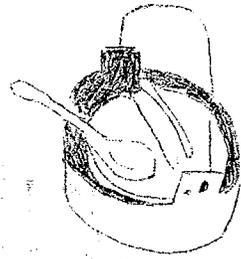
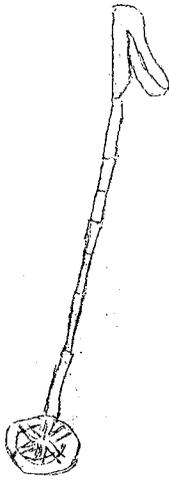
- 二年 (O L) 山野 山崎 平野 小川
- 岡田 高木 佐久間 西村
- 一年 八島 中尾 永井 山本泉 早瀬
- 菊池 内山 前田 上遠野 西尾
- 中井 星野 三枝 羽柴 岩井
- 稲葉

(八島記)

二年部員紹介  
D君は我部きつてのG O S S I P記事の迷( ? )ライター。しばしば彼の教養の豊かさ驚き入る。ところがさすがの彼もG O S S I Pに書かれてしかるべき失敗をしてしまつた。ここに紹介しよう。  
彼は熱心な研究により新しい料理を作つた。この料理に名前をつけようと思案の末、この料理の味付けに用いたしろう油の産地にちなんだ名前をつけることにした。教養あふれるところを見せようとした彼は、しろう油の産地野田や銚子からそれを「上総汁」と命名、食料計画にとり入れて大々的に宣伝してしまつた。後になつて気がついた彼は、「しもうた、しもうた」と言つてにが笑ひ。  
ある時BさんとPさんが前後して歩いて、中間の一点で支えられた橋を渡つた。さてどちらが下つたでしようか、答、橋は折れてしまつた。(いや失礼)



# 春 山 合 宿



1966.3

我々のクラブ活動一年間の集大成とでも言える春山合宿の地を八ヶ岳に決定したのは、夏山合宿も終わった九月の半ばであつた。当時、我々二年には夏山を終えて、ようやく足並みもそろいチームワークらしいものが出来て来た。そして、これからの山行計画を推し進める上で、また、心構えの上でも、究極の目的たるものをハキと定めておく必要があつた。それが春山合宿であつた。春山はここ数年途絶えていたが、去年から、我々の一代上の人達が復活されたもので、我々としては、この春山を継承し、発展させる義務もあつた訳である。

早速具体案を練り、十月の偵察山行へと計画を進めた。八ヶ岳は全般的にすそ野が広く、いわゆる極地法登山の形式をとりにくく、ゆえに次の三通りの計画をたてた。

- 一、行者定着 赤岳登山（技術的に無理です。）
- 二、泉野―夏沢峠―硫黄岳―横岳
- 三、泉野―夏沢峠―硫黄岳―天狗岳―黒百合平

右の第二・三案をもとに、十月の記念祭が終わったその日に夜行で偵察山行を行なつた

( to be strange 一年が金魚のフン

の如く随伴した。) 記念祭で準備が充分に出ず、また、夜行列車であつたので疲れが残

り、山行中の苦勞は推して知るべしである。

月とはいえ、すでに霜柱が心よい音をたてる。

登山口から夏沢峠までは平担ではあるが、かなりの距離であつた。春山合宿のための赤旗

を随所につけながら、ようやくオーレン小屋

にたどりついた。このコースに「ラッセル」

といういやな雪山必要条件が伴うことを思う

と憂うつであつた。翌日、硫黄岳登頂後、三

コースに分かれて下山した。中山峠―稲子湯、

夏沢峠―本沢―稲子湯、天狗岳―黒百合平と、

色々な下山路を踏んだのは、まだ本格的コース

が未定であつたからだ。むしろ写真は名

カメラマンが地形など沢山撮つた（後無役と

なる？）。幸いにも天候に恵まれ、紅葉の美

しさにもひたり、また、一年もいたのでにぎ

やかであつた。こうして、来年の三月に再来

することを胸に誓い、無事に偵察を終えた。

翌年二月、我々は学校側の承諾は得られな

いものという想定で、秘密に春山合宿を行な

り予定であつた。当時の高校の雪山登山に対

する世論の非難や、教育者の圧迫は、我々を

して非常に活動しにくくしていた。また、教

育庁の高校生春山通達も出された。結局、0

B 兼講師の小川氏と相談した上、我々の妥協という形で、大分難行していたコース選定も二月末には決定した。そして、これは学校側のOB全面委任という形となつた訳で、長年の学校側との対決に一明がさし込んだ訳である。こうしてコースは黒百合平定着、硫黄岳往復となつたが、これは高校生としての基礎的な雪上技術習得を主な目標としたのである。

三月、期末試験終了の十三日から右記の計画で最終準備にはいつた。参加者は二年全員六名、一年有志六名、OB三名で、計十五名のパーティー。器具、食料準備も順調、一番懸念されていたアイゼンもなんとか数がそろつた。そして、あとは二十日の出発を待つのみとなつた。

三月二十日、新宿駅二十二時集合。二十三日四十五分、松本行鈍行で、OB諸氏の見送を受け、深夜のネオンのまたたく東京を後にして、一路八ヶ岳へと向かう。早朝五時半茅野駅着。横なぐりに雪がほおを打つ。空は曇天、他パーティーも、続々降りて来る。バスで渋の湯へ。途中でバスが止まつてしまい、渋の湯まで予定外のアルバイトをする。道は雪が凍りついて歩きにくい。渋の湯まで十五分かかつた。その休憩所で朝食をとり、登

山カードも提出して、いよいよ本格的登山にはいつた。橋を渡るとすぐ登りだ。夏のコースタイムでは四時間である。幸いにもトレースの跡がはつきりとあり、しかも、新雪ではなかつたのでラッセルの必要はなかつた。山すそをまきつ高度を増す。荷物は重く、パランスがむずかしい。夏道と違つて、一步一步慎重に踏まないと、雪面が固くなつていず、すべりやすい。一ピッチで尾根に出た。強い風と多い雪。偵察の時つけた旗は色あせていたが、見えた時はなつかしかつた。やがて、尾根を捨てて、沢筋の最後の登高にはいつた。午前十一時、急に広々とした所に出た。このピッチは一時半、途中、少々手こずつたが三時間二ピッチで登り切つてしまつた。風はかなり強くなり、まつ毛がすぐ凍る。ただちに、橙、淡黄色、深緑のあざやかな色のテントが三つ張られ、昼食の用意にかかつた。温かい飲みものを作つて昼食を取つた。午後は雪上訓練をする予定だつたが、天候があまりよくないので、アイゼンによる歩行訓練だけをした。初めてはくアイゼン、初めて握るピッケルはなかなかうまくいかない。夜はOBの話の聞いたりして眠る。

二十二日起床四時、天気図もとり、今日の

行動予定を決めた。かなり低気圧が近づいていた。雪こそ落ち着いたが、風や曇天はあいかわらずであつた。OBとの相談の結果、午前中はアイゼンとワカン併用歩行。斜面の雪はけつこう深く、裕に腰まであつた。昼食をとつた頃から青空が見え始めた。雪の白さが目にしみる。天狗の稜線がはつきりと見える。つい今までは灰色のベールで隠れていたものが、ことごとく眼前に展開された。午後はスリパチ池で雪上訓練をする。

天狗岳は時間の関係で明日にもちこす事になり、美しい雪景色を楽しむ事にする。稜線に立つと手前に秩父連山、後には越後の山々が眺望された。雪庇が少し天狗の稜線から張り出していた。中山峠に下ると我々のテントが雪の白さに鮮かに対比していた。雪をかぶつた木々は蔵王の樹氷の如く美しい。

二十三日、昨日とはまた百八十度回転し、天候悪化。天気図によると二ツ玉低気圧が現われたからだ。

気温上昇の為、昨日の樹氷は悉く原色に戻つてしまつた。この低気圧による気象変化を体験できたのは意義深い。風は大分強いが予定通り出発する。順調なペースで天狗頂上へ向かう。一ピッチで頂上、記念撮影をする。

西天狗が頂上まですつぱり雪に包れた姿が、

下りの連続である。随所雪が深く荷を背負つ

唯歌

西天狗が頂上まですつぽり雪に包れた姿が、かすかに見える。視界はまだそんなに悪くない。

硫黄岳に向う。大分寒さがきびしく、手が冷たい。谷筋から吹き上げてくる雪まじりの風にもともに吹きつけられ目をあけられぬほどだった。しかし、雪の峻線歩きは天候の為気分がひきしまるもの、楽しいことに変わりはない。根石岳付近で風が急に強くなり、Oの判断で引き返す事にする。やはり大事をとるのである。我々二年部員にとつてはまことに残念であり何か気の抜けた感もしたが……再度天狗頂上、睫や髯が凍おりにしている。西天狗は見えなかつた。午後は風が強まつたのでOと協議の結果、行動をやめてテント内にいることにした。

気温上昇のため夜に浸水(雪がとけて水がテントの下からしみ入る)したテントが出る。かき出した水が大型コップエル三杯シユラフは水びたし。仕方ないから一晩おきていたそのな。

二十四日、朝起きると天狗の峻線がはつきり見える。テント場は大分よごれてきた。下山の日が来たのだ。予定は中山峠―緑池―稲子湯、直ちに撤取出発、中山峠からすぐ急な

下りの連続である。随所雪が深く荷を背負つている故にひとたび潜ると片足すつぽり入る。あつちこつちで大分苦闘している。

森林地帯の中を快調にとばし左手に稲子岳の大岩壁を仰ぐ頃には雪も大分少なくなつた。天気は良く、暑いぐらいだ。

屋頂緑池に着く。太陽が雪に反射してまぶしい。そこから一気に稲子湯へ降りる。途中で雪が切れた時は言い様のない淋しさを感じた。雪解水があつちこつちで僕達と競争しているかのように流れてゆく。そして若い春の生命が僕達を迎えてくれた。うれしい様で淋しい様な妙な気持であつた。

稲子湯に着いて昼食をとる。残念なことにバスの時刻があわず海尻駅まで二ピッチ歩く。

後を見ると八ヶ岳連山が仰ぎみやれる。硫黄岳こそ登れなかつたが、なかなか変化に富んだ山行だつた。しかし、この山行が僕達の目指してきたものであるとは我々二年生部員は認めたくない。

ともあれ、我々が春山を計画しやり遂げた事だけは皆の心に喜びとなつて、自信となつて残るだろう。ここに一九六六年度春山合宿は終わる。

### 雑感

我々は春山へ行つた。けつして強制された訳ではない。近年の雪山遭難増加という如何んしがたい事実にもかかわらず実施し、更に一步上を望んでいる。そこには伝統尊重、クラブ維持という要因もあるが、しかし、要は、「やる気」である。我々のクラブが春山を失なつたら一体何が残るか。一本の柱たる確固たる目標を失なうことにはならぬか。

ここに我々に春山は必要なのだ!

では我々は高校クラブ活動としての登山をどのような心構えで行なつたらよいのだろうか。伝統を継承する事は重要であるが、しかしそれにとらわれて全体を見通せない狭い視野の活動は危険だ。つまり、義務的慣習的に山行をくり返し、力以上の事を試み体面を整えようとするのは愚行である。要はひとつの代が全力を出してその特徴を強く打ち出せばよいのである。以上考えてみると「必要な春山」もある観点からは必要であるが、絶対と言えぬものでもないさうだ。

我々の代以降、学校との妥協により春山が行なえるようになり、それに対する嚴肅な感が薄らぎ「安易さ」という危険な考えが現われてきているように思われる。それを改めな

ければと思うと同時に二・三年前までの「コピリシ」とした空気がないのは残念だ。「和」は必要であるが、春山を迎える諸君は心の緊張を忘れずに対処してもらいたい。最後にクラブ活動で人間的にも成長するように願う。

三年 岡田 徹

コースタイム

三月二〇日 バス停止八〇一八四五渡の湯九四三〇一〇五二休一〇二一〇二二〇黒百合平一暮営完了三一五一午後付近をアイゼンをつけて歩く。

三月二一日 起床四三〇一〇一〇一ワカシ・アイゼン併用歩行一〇〇五暮営地一〇〇一雪上訓練一四二五暮営地

三月二二日 起床三五七一〇九一七〇〇東天狗七〇五一七二九根石岳七三四一八〇七東天狗八一二一九〇九スリバチ池(雪上訓練)九三四一四四四暮営地

三月二三日 起床四〇〇一〇一〇一〇一〇中山峠六四九一一一五九林二〇五一一二五三海尻駅

食料計画

二〇弁当	朝食	昼食	夕食
	キャンパン	クカレーライス	クリーム

二一ミソ汁 飯	ガリバルヂーホークテキ
二二雑煮	スープ 飯
二三雑煮	ガリバルヂーシチュウ 飯
停滞コンソメスー	キャンパン
飯	ジャム
ジャム	ソフト

注一、停滞は計画のみ

注二、朝食にはいずれも、アメ、ジュース

注三、レーズンがつく。

注四、ホーレン草を除き野菜は全て乾燥野菜を使用

使用器具

幕営用具 冬用テント三張 テント部品予備 テントブラシ三 ソウキン三枚

燃料関係 ラジウス大四台 小二台 メタ

九罐 ポンプ二 石油九リットル

ソク六本

炊事関係 飯ナベ一 コップ三 水用

ポンプ三 タワシ三 食器三〇 お玉

包丁 ヘラ各三

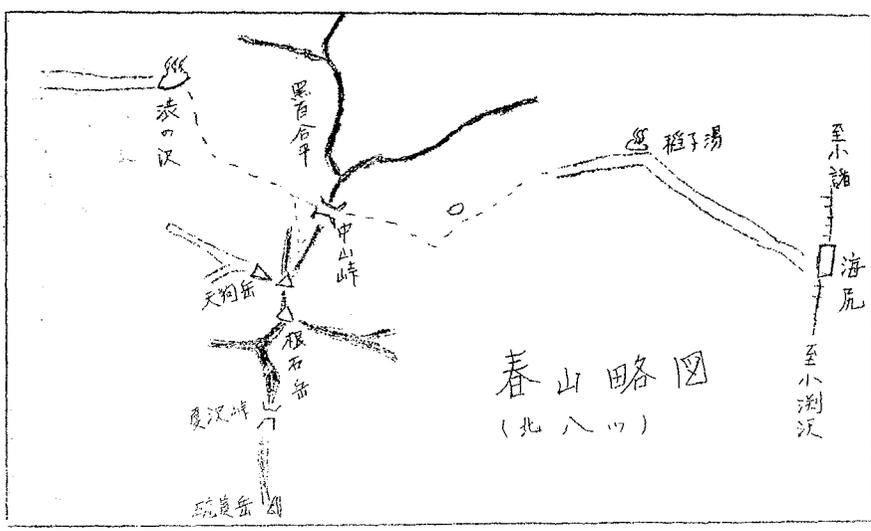
その他 赤旗 スコップ キジベト六 針

金 ラジオ 天気図 目覚し

参加者

OB 小川氏 梶内氏 福田氏

- 二年 伊藤 山野 山崎 平野 岡田 小川
- 一年 八島 中尾 永井 西尾 前田 内山



# ☆ 個人山行報告

南アルプス

六六・八

八島 中尾 石俣

北岳から光岳までの南アルプス南部縦走。

これが私達が夏山合宿のコース選定も行なわれていない四月頃から計画していたものであった。しかし、0日に意見を聞いて見ると、あまり賛成してもらえなかつた。その理由として、南ア初めての私達がそんなに奥まではいつては何かと危険が多く、もし遭難した場合もすぐに助けに行けない。前衛の山々を越えずに初めから北岳へ登つてしまふのはよいこととは言えないそうである。この忠告に、上高地にバスがはいることを非常に残念に思つていた私達はたいへん反省して計画を改めこんどはアプローチを思い切り長くつたコースにかえたのである。こうして、鳳凰三山と甲斐駒と仙丈岳と白峰三山と塩見岳と三伏峠、という南アルプス北部金山縦走が決定した。

八月七日

午前中、学校でバックをする。三人なので、ひとりが器具類全部を持つという悲惨なことになる、残りのふたりで食料を持つた。三人とも水を入れると四〇Kg近くになつてしまつた。

再び四時頃学校に集まつて立川まで行く。

二日前、女子が夏山合宿に出発したときとはだいぶ違つて、見送りは二人だけ。サシレも飴ひと袋であつたがやはり嬉しかつた。甲府まで行き、駅の待ち合い室で一夜を送る。途中の駅で八島がホームに出ている間にドアが締まつて危うく窓から飛び込むというおもしろい光景が見られた。

八月八日 芦安―夜文神―南御室小屋  
まだ夜も明けやらぬ甲府駅を一番バスで出発し、芦安までひと眠り。そこでバスを乗換える。山の夜明け特有のもやが、これから向かう未知の山々を、「知らぬが仏」とも言いたそうにおおい隠している。

夜又神荘の近くで、持参の弁当を食べ、峠へと第一歩を踏み出した。八島がリーダー、中尾がトップ。登りも割合急であるし、荷物が荷物だけに、バテルことを予想して、ゆつくりゆつくりと高度をかせいで行つた。しか

し、やはり三〇分以上は続かず、何度も休みをとる。

それまで、ほとんど見はらしがなかつたせいか、突然現われた白峰三山はとてつもなく大きく高く見えた。四日後にはあの稜線を歩いているのだと思うと、胸がときめく。すぐにまた森林の中に入つて見はらしが悪くなつた。登りはいつこうに楽にならず、僕と中尾がとうとう音をあげて、大崖頭の少し前で第一昼食をとる。しかし、その後は三人とも頑張つた。途中、野崎さんたちの代に春山合宿で用いた、ルートを示す赤いきれを数枚みつけたので記念に持つて帰ることにした。

坂平からは、辻山をまいて、南御室小屋までひと思だつた。居ごちのいいテント場で最初の山の夜を野菜サラダと目玉焼とで祝つた。

八月九日 鳳凰三山縦走

合宿とは違つてシユラフなので、三人ともよく睡むれて好調である。今日はぼくがトップをやり、大きな南御室小屋の、裏の道を登る。最初から相当な急登であるが、昨日に比べると速いペースで進んだ。それでもコースタイムには遅れがちである。まるで奥多摩を歩いているような森林の道だが、標高二



昨日下つて来たよな道を少し歩くと、道が直角に曲つている。まつすぐに行きそうに思ふから気をつけなければならぬ。そこかへすぐ野呂川越を経て両俣のだいぶ予定より早く着いたので、昼食をここでとる筈だつたが、大滝まで行くことにして左俣沢をつゆる。石がごろごろした沢を一時間ばかり。だいぶ腹もすいてきたころ、滝の快い響きが伝つて来た。

ここから初まる北岳の登りは昨日の仙丈岳の登りとならぶ長い急登であるが、ザックが軽くなつたせいも三人とも元気であつた。しかし北岳の頂上からは、何も見えなかつたし雷も鳴り出したので早めに稜線小屋へ向つた。

稜線からはずれた平らな所を見つたので幕営しようとしたら、パトロールの人に注意され、しかたなく小屋の近くに行つた。南アルプスでもこんなことがあるのかと、少し悲しかつた。そこから、水場までは三〇〇mも下らなければならぬ。一二ℓタンクを持つて行つたので、一回の往復でまにあひ、とても助かつた。二九〇〇mの稜線の夕暮れはすばらしく、昨日登つた仙丈岳の大きなシルエットに見とれていた。

八月十三日 間ノ岳―農鳥岳往復―井川越

テントの外に出て見ると、一面の雲海の上に薄赤く染つた富士が、初め何んだらうと目を疑つたほど、近くにそびえている。太陽はまだ出ていない。頭上には雲ひとつなく、三〇〇〇mの稜線を歩く今日、快晴に恵まれたことを感謝した。中白峰を通過し、いくつものパーティを抜き、南アルプスも相当俗化されて来たことを残念に感じながら間ノ岳まで稜線をとばす。

間ノ岳の雪溪で昼食をとつた。ふり返れば甲斐駒をしたがえた北岳の雄姿、その西には仙丈岳、東には五日前の今頃歩いていた鳳凰の山々が低くつらなる。速くには、八ヶ岳や奥秩父まで見えていた。前方には、塩見岳、荒川三山と未知の山脈が次いでいる。

農鳥岳を三時間で往復し、再び同じ雪溪で二回目の昼食をとつた。そこから、井川越まで一気に下だる。だいぶ疲労が蓄積して来たためか、幾度どころびそうになつた。

八月十四日 塩見岳―三伏峠

起きると雨の音がしている。もう明日帰るといふのに、こんな所で停滞とは、と思つたが、天気図を見て協議した結果、ますます悪くなる可能性があるのでやはり出発することにした。

単調な道を雨にぬれながらひたすらに歩いた。塩見岳の登りにかかつて、森林限界を越えると、強風がもろにビシヨビシヨのからだに吹きつけて来る。夏山凍死の感を味わいながら、頂上でも止まらずに二時間歩き続けた。やつと再び森林にはいつたので、やつと昼食にしたが、歩き出す時には膝や足首の関節が強く痛んだ。もし頂上で休んだら、どうなつていたかわからない。

三伏峠まで、割とあつた。途中、雨もやみ伊那谷をはさんで、中央アルプスが碧く横たわつていた。

峠で幕営の予定であつたが、高い金をとられるよりは、塩川の近くまで行こうというこゝとになり、急坂を駆け下りた。

これで、一応この山行を終えた訳であるが苦しかつただけに大きな自信を得られた。また、さらに南方に見えた山々にもいつか試みようと思ひ合つて、山行最後の夜をとじた。



この山行の目的は、夏山に行けなかつた一年の体力向上と生活技術習得である。

台風接近のため一日延期し、八月二十三日早朝、立川を発つ、増富ラジウム鉱泉に着くころには、雨が降りだした。

ポンチヨを着て富士見平に向かう。二ピツチで金山までくる。このころになると、一年は早くも疲労の色を見せはじめた。彼らには二十五キロのザツクは苦なのだろう。雨も強くなつた。十五時瑞牆山荘前着。二年協議の結果、山荘前に幕営。翌日は、瑞牆山をやめ、金峯国師の縦走だけにした。

八月二十四日 晴 出発して一ピツチの急登で展望台についた。南アルプスと八ヶ岳が望まれた。目前には瑞牆山の岩峰が朝日をうけて威圧的に輝いていた。富士見平をすぎ、森林内の登りにかかる。一年二三人がバテ気味だ。やがて最後の水場の大日小屋を過ぎ、本格的登りになる。奥秩父特有の石楠花と苔の多い森林になり。とうとう一年がへばつてきた。バテの激しい一人を列からはなした。途中で二年が連絡に走つた。千代の吹上まで

行つて待つことにする。二・三の急登をし、三十分位で千代の吹上着。また連絡に走る。一人は歩けそうにもないので、大日小屋で休ませるとのこと。本隊は千代の吹上で昼食し、金峯山に登つて富士見平まで戻り、翌日は瑞牆に登ることになつた。這松、石楠花の中を抜け、金峯山頂に着く。全員で登れなかつた

二年部員解説②

B君。彼のむさくるしい身なりは、厚生省水洗便・（失礼）推薦の予定である。彼でも、この容態を恥ずかしく思つていて、フォークダンス講習会には、参加しなかつた。  
なお、彼の幼少の日記によると彼は大きくなつたら「お嫁さん」になりたかつたそうである。

ことが心に残る。展望はなかつたが、五丈岩が印象に残つた。大日小屋まで一気に下る。バテた一年は元氣になつていた。富士見平まで下り、幕営。マキで飯を炊く。  
八月二十五日 快晴 空身で瑞牆山に向かう。水場を過ぎ、谷沿いの急登。空身だから

快適である。赤い標識をたどつて岩峰の間を進み、北側から山頂に出た。南アルプスと八ヶ岳が目前に横たわり、富士の雄姿が遠く望まれた。岩の端に立つと足がすくむ。隣の岩峰に我々の影が映つていた。カルピスで乾杯。一気に下山。富士見平で楽しく昼食をし、増富まではとばす。一年は暑さとスピードのためか疲れてきたようだ。掛声をかけながら頑張つて、十二時半に増富についた。

今度の山行では一年の力を過大評価していたようだ。しかし、夏山合宿に参加できなかつた部員も長い山行をする、という目的を達することができたと思う。

参加者

- 三年 C 五平野 二年 S 八島 永井
  - 菊池 山本泉 早瀬久起 一年 伊庭
  - 山本太一 勝侯 中村 早崎 荒木
- 以上十二名

山 行 総 覧

- 一九六五年
- 九月公式山行丹沢山集中 九・二五―二六
- 八ヶ岳偵察 十・一一―一二
- 蓮峰（個・C 高木）十・一七

六ツ石山 日原より二班 十一・一四

スキー合宿 大湯温泉 十二・二六一三一

一九六六年

長沢背稜 長沢山まで 一・一五一一六

御前山 二・二〇

春山合宿 八ヶ岳 三・二〇一三三

新入生歓迎会 川苔山 四・一七

谷川岳雪上訓練 (個・二年男子) 五・一

七ツ石山 (個・二年女子) 五・三

五月公式山行男子 雲取山 五・七一八

同 女子 御前山 五・一五

小金沢連嶺偵察 五・一四一五

六月公式山行女子鷹の巣 六・一一一二

同 男子少金沢山六・二五一二六

水無川沢登り (個・二年男子) 六・一九

葛葉川沢登り (個・二年女子) 七・一七

夏山合宿男子 剣立山 七・二六一三一

同 女子 常念奥穂高 八・六一一一

南アルプス (個・〇I八島) 八・八一一五

金峰山 (個・〇I平野) 八・二三一二五

三ツドツケ (個・〇I中井) 八・二七

和名倉山 (個・〇I八島) 八・二八一二九

### 提言

## 登山に於ける現代的危険からの脱皮

八島 久 男

登山に於ける危険は自然と人間のすきまに現われるものである。危険の自然の側については多く論じられて来たし、また今後も論じられるであろうが、これと裏腹の関係にある人間の側については断片的に付け加えの述べられてきたように思う。私はそれを歴史的な観点から明らかにしてみたいと思う。

約言すれば、登山に於ける現代的危険とは他人の力に頼る登山と言える。最初にも述べたように登山に於ける危険は自然と人間のすきまから現われるのだが、そのすきまを埋めようとすると他人の力は結局はそれ自身すきまと化し、すきまは拡大し、危険の現われる機会を多くしている。その原因を歴史の流れの中で考察してみよう。

第一に現代は機械時代である。生産過程に於いて今や機械は何物にも邪魔をされない王者であり、その上機械は日進月歩の勢いで高度になつてゐる。機械をより高性能に且つより安全にしようとするに従つて機械はより複

雑になつて行くのだ。このようなことは、必然的に、一方に優秀な頭脳、もつとも彼らは支配階級の御用エリートでしかないが、もう一方に無知な巨大な大衆を作る。但し我々はこのどちらにも属していない。前者は、博識であり、機械を作ることが出来る。それに対して後者は、複雑な機械のしくみを理解することができず、前者の命令により、無理解のまま単に機械の操作をし、あるいはそれを助ける。先進国アメリカでは、技術者と言われる人でさえ、機械の構造を知っているだけでその意味は理解できないという話を聞く程であり、この傾向はまぬがれ得まい。

この問題の大衆が、登山をしたらどうなるか。非常に端的な例を上げよう。ある人が、山に携帯無線通信機を持つて出掛けたとしよう。勿論彼はその使い方を知つてゐるので、彼の行動範囲を拡大することができる。そしてある時、携帯無線通信機を必要とする時にそれが故障したとする。説明書にある故障な

ら彼は修理できる。しかし、説明書にない故障は修理できないのだ。このような危険は機械の発達により増大することは明らかだ。

第二に思考面について言うなら、現代大衆社会は彼らなりの合理性が支配している。この合理性を仮りに現代合理性と呼ぶことにする。現代合理性はあまりに複雑な社会にあるため、社会の複雑なしくみは解明することなく、単に表面的に現われた現象のみを対称として立っている。自分の周囲の状況を自己に先き立つものとして肯定し、その状況そのものについては問うてはならず、如何にして現実に対応するかということを経済の目標としている。そういう意味で現代合理性は機械的唯物論的であり、またことなかれ主義的な小市民的な思考方法である。現代合理性は、機械文明社会に於いて支配階級が宣伝し、被支配階級であるところの大衆に受け入れられ易く、しかも大衆の中に入つた現代合理性は更に大衆を現代合理性を受け入れ易くなるように分解して行く。

さて、大衆は登山を現代合理性によつてどう考えるであろうか。どう考えるもこう考えるもないのだが、大衆は登山を大衆娯楽登山リクリレーションとして現代社会の中で合理

化している。大衆は現代社会に於ける疲労、不満を現代の社会へ返すことはできず、その他の何かへうやむやに葬らねばならない。

従つて登山は無気力な大衆の疲労・不満のけ口となる。彼らは決して自ら困難を求めず安易へと流れる。なぜなら自ら困難を求め苦勞することほど不合理なことはいからである。もし、若者達が自ら困難を求めているように見えても、彼らはスリルに自己を陶醉させ、現実の自己から逃避しているに過ぎない。いずれにしろ彼らには思想性はなく、現代合理性の性質から言つて他力本願的であり、安易を求めようとする所に危険の存在する可能性は大となる。

第三に現代は修正資本主義社会である。政府は国民に奉仕するために権力を集中し、あらゆる国民生活の場面に指導監督を強化している。登山に於いても、公共機関が大衆登山を援助し指導監督をしている。また、大衆側もそれを無意識的に受け入れ、自分達は他人が援助してくれるのを当然と考える。

今まで述べて来た大衆登山の機械を媒介とする危険性、現代合理性と無思想性、指導に対する受身から、現代大衆登山の弱さが生ずる。それは現象的には、自分の力で生きて行

けないという、たくましい生命力の欠除によるか弱さである。この弱さの原因は、客観的な見地からの社会的、あるいは知的条件によるばかりでなく主観的な見地からの「登山者自身の側の」主体性の欠除という条件にもよつていゝ。

社会的にも大衆は「対象」として存在し、それ自身主体性に欠ける。その登山家も、援助する。規定する、動かす、指導監督する。・・・などあらゆる能動的なことに對して対象としての登山家である。大衆登山家はあえてそれに対抗せず、主体性の欠除に甘んじている。主体性のないことは非常に樂である。何故というに、何ら自ら決定する勞をとる必要がなく、他人の決定に従い、殺那的な情緒によつてそれに支持や不平を与えればこと足るのである。それに比べて、主体性を持つことは苦である。それは白紙からの自由であり、全て、自分の行動に自分で責任を負わねばならない。自由の重荷とはすなわちこのことである。ところが多くの登山家は、この重荷を自ら背負うようなことはせず、それを他人に預けてしまう。このたくましさの欠除こそ主体性の欠除による弱さなのだ。

現代の登山の弱さについて、具体的な例と

してパーティーについて考察してみよう。

登山のパーティーという集団は、割合少数の人間から構成されているが、運命的な、且つ不合理をも認める不分明の接触による前近代的集團的集團ではない。また、今後もそうではないだろう。登山のパーティーもやはり近(境)代的集團なのである。現代合理性による結合で、必然的に少数の指導者と、多数の被指導者を作っている。問題は勿論この多数の被指導者である。彼らは、主体性など何の必要もなく、将棋の駒のように、個人としては価値がなくても成員として価値があればよいことになる。そして将棋の駒のように、彼ら一人一人は特技があり、それが分業という形で仕事をし、山へ登る。従つて、彼らが彼らとして山へ登つたのではなく、成員(隊員)として他人の意志と援助によつて登つたのである。いやそればかりか、他人の意志と力によつてのみ登ることが可能だったので、彼らの個人の力ではできないことなのだ。それが危険なのである。彼らが優秀な指導者とともにいる間は良いが、その指導者に事故があつたり、あるいは何かのために彼らだけのパーティーができたりした時、その弱さはありありと現われて来る。もともと彼らだけで

は登れない彼らだつたのだから。

彼らのパーティーが崩壊したり、あるいは、一人迷つてしまつた時の彼らは更に弱く、悲慘極まりない。そうでなくても不意の事故にあつた時、文明に頼りきつていた彼らにどうして生き抜くことができようか。文明への極度の依存により、彼ら自身は非常に弱く、自身の周囲に危険の現われる可能性を増大させたのだ。このように、現代の登山は人間の側に現代的な危険をはらんでいるのだ。

さて、そこで我々はこの登山に於ける現代的危険から脱皮しなければならぬ。それは種々様々な困難を乗り越えねばならないが、ほほ次のように要約できよう。「パーティーの各成員は各リーダーであり、一人でもよいのだがなお且つパーティーを編成する」という状態を目差さねばならない。すなわち、各個人が全てリーダーとしての実力を備えるばかりでなく、各個人が主体的な働きをする必要がある。

主体的な働きのできるリーダーの資格は、そう簡単なものではない。山で起りそりを事柄に対する知識ばかりでなく、起りそりもないことが起つたときに充分な処置のできる応用力と判断力が必要である。その他諸々の要

素も必要だが、私が強調したいのは、主体性

及び彼自身の思想を持つことである。そのためには社会的にも主体性を回復することが必要であり、如何に博識で頭が切れようとも御用エリートのような人物ではならない。一見指導者のようであつても、それは命令を出す機械であり、個人としての価値はまるでない。現代合理性による思考、すなわち無思想性は、如何に危険なものをも、その世評によつては持ち込んでしまふ危険性を持つている。すなわち有能なリーダーとは、自由の重荷を全て一人で背負うことのできる人間でなければならぬ。

次に、登山に於ける危険が自然と人間のすきまから現われるのだから、用意のできた人間はそのすきまを埋めるべきである。文明への過度の依存を反省し、それを改め自然の中で自己を裸のまま鍛えねばならない。

この厳しい条件を持つて、現代的危険から脱皮するために、部の運営に関しては次のことを実現することが必要であろう。リーダーとして資格のある者だけが、民主的を話し合いによる決定権を有する。この民主制とは、アメリカのような大衆民主主義でもなく、中国のような指導された民主主義でもなく、英

際の行動に支障をきたさない限りその決定方法は徹底議論によるべきである。この議論には一斉の妥協は許されず、また、問うてはならないものあるいは問う必要のないものはあつてはならない。また、意見の多数、少数をもつて意見の優劣を決めることはできず、反対者がもう論理的な反対をすることが不可能になつた時決定がなされるべきである。このような民主的な運営が、危険から我々を守り更に発展する脱皮への最も手近な第一歩であると思ふ。

可能性の開けたる我仲間達よ、恐しいまでに深く考えてみよ。登山が自らの足で歩くのと同じように、自らの頭脳をもつて。

## 女子部への再考

### 沿 革

一九五二年度  
四月下旬、女子部員第一号入部 二年生である。五・六月の公式山行は女子としての力の範囲で途中参加という形で行なわれた。

夏山合宿は行かなかつた。

一名では、どうにも活躍できないので女子部員をふやすために努力するが実らず。

一月のスキー合宿のとき、女子二名入部。

二月の山行も男子の中に入つて行なわれた。部員不足で思ふような活動はできなかつた。

一九五三年度

新入部員なし

七月に継続者を得るため、部員外の女子を誘つて山へ行つたが入部者なし。

一方、三年生である部員は活躍し、三月の春山合宿は鶏冠尾根より甲武信、金峰山。

男子に混じり女子一名。サポート隊として参加。

この頃は男子と一緒の山行であつたが、特に女子としての特別扱いは受けず、男子と一線上に立つて活躍。

一九五四～五年度

女子部員なし

一九五六年度

女子三名。男子と共に、公式山行・夏山合宿は裏銀座。

一九五七年度

一年四名。毎月の公式山行は男子と共に行なわれた。夏山合宿は剣岳、雪上、岩登り

訓練は参加せず、テント内にいる。

一九五八年度

女子二名、男子と共に公式山行。

夏山合宿は横尾定着で、女子の合宿として執行。毎月の公式山行などは、男女を考えず計画し、実行。

一・二・三年と部員がそろい、今までになく充実した活動ができたが、まだ女子部としては、確立していなかつた。

一九五九年度

女子二名入部、公式山行は男子と共のもの、また別々のものがあつたが、雪刃面などで、男子の間で女子のことが少し問題になつていた。

一九六〇年度

女子一名入部 途中でやめる。

一九六一～二年度

女子部員なし

一九六三年度

一名入部。公式山行を男子と共に数回行なつたが、一人という数、そして体力面などで男子との活動に不都合がおこり、話し合いの結果やめる。

一九六四年度

女子六・七名入部 後、四名。

毎月の公式山行は男子と共に行なわれたが、体力面で男子と差があり、山行は女子の歩調に合わせて計画された。

夏山合宿は男子と別に行なわれ、中央アルプス駒が岳、宝剣岳。参加者は女子三名。

女子の指導方法がわからなかつたので、合宿は男子と同様の計画により執行され、女子としては、きついものであつた。

女子は冬、春山はやらないことにする。

MWV Cの中で一端ときれた女子部員を再び育てるには、かなりの苦勞があつた。

#### 一九六五年度

これからの女子部を継続するための部員確保につとめ、一年部員六名。

トレーニングは男子と完全に別にやり、公式山行も別。ただ二回集中登山を行なう。

夏山合宿は白馬岳周辺。三年の男子とOB付き添いのもとで行なわれた。

この年になつてまあ一応、女子として独立し自分達で山行というものを手がけられるようになった。

#### 一九六六年度

一年六名。

夏山合宿は常念山脈の一部と奥穂高岳。

現役女子十五名というパーティーでの合宿。

合宿も女子だけの手で、ということも夢ではなくなるだろう。

今年度になつてやつと女子が一、二、三年とそろつたわけで、これからが女子部としての本当の活動のときである。

### ◇女子部員に望む

#### 十二期 梶内俊夫

西高山岳部からW・V部と、二〇年になる部史のなかで、最近二・三年の女子部員の活躍はかつてみなかつたことである。

女子部員数の増加、体力的に男子と同じ日程を消化できないであろうという点から、女子だけの山行がなされてきたが、そこには女子部員の、質、量にわたる充實があつたのである。たしかに今年度の五・六月の奥多摩、夏の北アルプスに参加して、なかなか立派な山行をすると感心した。しかしながらどこかもの足りないものを感じた。それはなにか、型にはまつていて、新鮮さに乏しいということである。単に部の行事を次々に消化していくだけという感じがしたのである。高校生としての型にはまつた登山、たしかに目に見え、全山登山を行つていように見える。しかし、代々受けつがれてきたものが、単に形式だけのものになつて、そのなかに各自の山に対する強い意識といつたものがうすれてきたら、ある時点において、パーティーというものが突然むなし、無力な存在となつてしまふのではないかという気がしたのである。たとえ女子であつても、活動の場として山を選ばず、山という平地と異つた条件で安全に生活し得るといふ、山登りのもつとも基本的なルールを守らなければいけない。そのためには、各自がパーティーの一員であるという自覚、また上級生であるという自覚、山に対する認識、一つ一つの行動に対する意識、といつたものは当然要求され、また満足されなければいけないのである。そして、各自の能力、パーティーの能力を確実に把握したうえで、一つの目的をもつた山行が計画されるのである。そこではじめて、西高W・V部女子部の山行という一つの型が生じてくるのではないかと思ひ、残念ながら現在の西高には女子部を指導していきける女性はいない。女子部の歴史は、現在の三年生、二年生を中心として今からつくりだされていくのである。それだからこそ現在の部員の自覚と成長がまたれるのである。高

れというのではない。むしろそのような傾向、そうした方向に女子部を向けることは大反対である。女子には、女性でなくてはできない細かい注意と指導が必要であると感じたからである。そういった指導者の下で、女子だけで構成されるパーティで、きめの細かい楽しい山行きを目指してもらいたいのである。具体的に、女子の場合三〇Kg以上の装備を背負うことは無理であろう。そのため一週間という日程が限度になるかもしれない。また一日に歩ける時間、距離も男子に劣るであろう。

男子と同じ山、同等の行動ができるように努力しろというのではない。自分達の体力、自分達の能力を考え、山行計画を練り、登る山を吟味してほしいのである。時には馬車馬の如く、黙々と重い荷物がかつき一日中歩くことも良いであろう。しかしいつの場合にも、頭をあげ、周囲の情景を観察し、行手をにらみ、たどってきた道をふりかえる。そうした態度を身につけてもらいたい。

なによりも各自の力をパーティの力として結集させ、より安全に、より確実に、きめの細かい、意識した、知的な、高校生らしい登山を目指してほしい。

その結果、パーティが一つの有機体となつて動きだす、その時、皆んなで山に登ることがこんなにも楽しいものか、W・V部に入つてほんとうによかつたという感動が生まれてくるであろう。

とくに女子部員には、一つ一つの山行が、豊かなおもいでとなつて心の中に大事にしまつておけるような、そんな山行を望みたいのである。

#### ◇女子部を考える

女子部ができて三年目。現在、私達が部を運営しているが、運営上の指針となるものは去年の活動であり、去年は一昨年のものであつた。すなわち、まだヨチヨチ歩きの女子部は男子部から受け継いだものを、そのままやつているのである。ゆえに今の活動の方針は女子部内部から起こつたものではない。自分達で築いたものではないのである。しかし、一応自分達の手で運営していて、自分達のことと考えられるようになった現在、女子部のこれから考えることが必要となつてきていると思う。

「女子部は男子部の縮小化されたものでは

いけない」と前々から言われてきた。それでは、女子部の登山とは、女らしい登山と何と云うものだろうか。色々細かい神経の行き届いた和らかいフンキキのものであるだろうか。しかしこれを実現するのは実にむずかしい。実際、山へ行けば時間に追いまわされ、細かい神経をなんて使つていられない。心にゆとりを持つことが必要である。ゆとりができれば自然、細かいことにも気を使えるであろう。心にゆとりをもつには、まず山行に自信がなくてはできない。今年の夏山を振り返つてみて、記録的（一日の行程の長さ、山の高さ等）には、一大進歩だと思ふ。しかし、内容が充実していたとは思えない。ただただ毎日が追い回されているような気分が我を忘れていた。それだから合宿が終つて一カ月半の今、考えてみても何ら印象のないものである。

反省することは多い。なんと云つても実際の運営がOBによるものであつた。自分達で行なう自信がなかつたのではないか。これから山行は、どんな小規模なものでも良いから内容が充実していて、自分達の手で行なえるものにした。

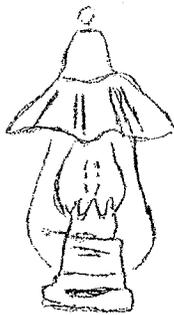
女子部のこれからを充実したものにするには、きちんとした目標があつて、運営が方向

寄稿集

づけられていることが必要である。しかし、その目標とは何であろう。女子部としての目標とは・・・。男子部も長い歴史を経ての今の状態である。最初は混乱したこともあった。女子部だとして、速急に目標を決める必要はない。無理である。ただ、今は、女子部の基盤をつくる大切な時期であることを、一人一人が自覚することが必要である。そして今までの成功、失敗をもとにして、常に女子部のあり方、目標を考えていこう。

二年部員解説③

○さん。彼女は女子部の異色（色ではない）な存在である。彼女は、山では開拓精神に燃えてか、計画外を進み、川では測量のこめかほ、突然おしりから飛び込んで水深を測った。なほ、彼女は最近、足の太くなつたことを気にしてか、大根を見ると吐き気がするそうである。



○入部して

古西和天

四月に行なわれた新入生歓迎会の時、ぼくはまだ友達がいなかつたのであまりおもしろくなかつた。それに登りの休息の時、腰かけていたらOBの人におこられたので、早くもいや気がさしたこともあった。しかし練習を重ね、山行を重ねるうちに徐々にこのクラブの良さがわかつて来た。そうして半年が過ぎたわけだが、一番記憶に残っているのは夏山合宿である。ぼくは回りの景色に圧倒されてしまつた。そして合宿からの帰りの列車の中でワングルに入つて良かつたと思つた。

登山は大変良いスポーツだと思ふ。単に肉体的な鍛錬のほかに、種々の精神的な向上をはかることができるからである。もちろん他のスポーツでもそれらをはたすことができるが、登山には、登山にしか望めない物があると思ふ。現在世間では、高校山岳部のあり方

についていろいろと言われている。がそれらは概して一部の軽卒な人々によつて起された事故を高校山岳部のすべてであるように言っていると思ふ。しかし少なくとも我々は、毎週三日トレーニングをし、山行をするにあつては充分な事前調査を行なつてゐる。そして実施する時は何人かのOBの人に同伴してもらつてゐる。世間で言われているような軽卒なこととはしてゐないつもりである。

いろいろ書いたが、何しろ我がクラブは良いクラブである。ぼくは前にも増してワングルに入つて良かつたと思つてゐる。

○入部して五ヶ月

山田優子

机の中から四月にもらつたワングルのOMパンフレットと、生徒会案内を取り出して、あの頃を思い出しながら読んでみた。西校入学その日、私はそれらを読み、考えていなかつたワングルへ、後日入部してしまつた。運動神経ゼロ、実力本位の世界はいやだというのと、自然の中で楽しみたいと思つたのがきっかけだが、主に、OMパンフレットの紙さばきにまいつたのが入部理由である。現在まゐる五ヶ月、三回の山行と夏山合宿に参加、呼





東京中の人の見送りを敬けていいはずに、実際は砂粒程の女子と恐しい先聲だけ。日の丸の旗もない。冷たいネオンの光群だけが、意外に澄んだ都会の大気を通して胸に迫つた。精神安定剤で気を沈めたのかかわらず、列車内ではやはり寝られない。やたらと精神ばかり落ちついている。

というわけでズーツと飛んで、黒部潮から地獄の旅路へ発つて一回目の休息の時は、実は体調思わしくなかつたのだが、我八島御大から、どうだ、と問われた時は、まあまあです。と非常に曖昧なことを吐いてごまかした。僕自身の山に行く理由を問われれば、僕は答えるにちがいない。理由なんかないよ。しかし、この独自の深遠なる意味を正確に解つて下さるのは幽玄谷の仙人ぐらいのもので凡人たちはキザを言いやがると叫ぶだろう。そこで、もつともらしく書くと、一に自己逃避があり、二に東洋的な自己の自然との包含次に少女趣味的羨望、そして最後にしようれいの気のあるふれた社会から避けようという自己を聖人化した未熟な惑いから、しかし、ここでその詳細を講釈する気はさらさらない。はしご段乗越にたどり着き、夢に描いた剣の山の、なんとも好ましい、チャチな表現の

きかない、あの苔の生えたような、山すその一部を目にした時、さつきのようなヤボないズムはハハリ拭われ、ただ葉やかなつ来て良かった」という気だけが残つた。

雪溪は人が登るのを下から見るのがいい。自分もああいう姿なのかとすくなくならず気分が良かった。が、それは本の最初だけで、あとは言わずもがな、僕は足が自分の意志の外でも充分に働きうることを知つた。

剣平のテント場からの剣本峰は写真でよく見かけるが、やはり本物の素晴しさは別で尻の穴がモゾモゾしていきよう虫保有者の苦惱がはつきり解明した。次いでに、ここで記念すべきお初の大キジ有り。

忘れられぬひとつの場所に五色が原があるあの幸運の日の最後を飾るにふさわしく、霧の五色が原は白黒映画の映像といじらしい植物群を見せてくれた。僕にとつてあの印象はサンテグジュベリの「星の王子さま」の世界だつた。

こちらへんで文中断したいが、お気付のように僕はこの合宿で色々なことを実感として知つた。苦しさはもちろん、美しさ、喜びをも……これが最大の収穫。

一寸、断わつておくが、山行は静かに発つ

べきものぐらい僕も知つている。冒頭の文に關する注釈。

さて、僕が今でも、そばで一心に猥談を語る友の話しには耳をかそうともせず、夏山合宿の思い出にふけつているといふのは本当か否か。それは、そう明で賢明で偉人である皆さんの御想像に任されることに当然なりませう。

## ○初めての沢

羽柴春実

七時十分、下北沢から電車に乗つた。OBの方に頼みこんでの沢登りである。今日行くのは丹沢の葛葉川。沢登りときいて心配した母に「大丈夫よ」などと言つて家を出はしたものの、期待と心配の混じり合つた憂な気がする。大妻野の駅近くの商店でわらじを買つてからバスで菩提へ。バスをおりてから沢に入るまで少し歩いた。暑い。全く暑い。まだ朝のうちだというのに、太陽はカンカンと照りつけ、汗がポタポタ地面に落ちては黒くあとを残す。

さすがに沢に入ると涼しかつた。両側に木が繁り、水がサアサアと流れているのはいかにも夏らしい感じがする。ここでわらしには

き替えたのだが・・・、わらしをはくのも案外むずかしいものである。さて、登りはじめ。濡れた岩の上、浅瀬の中をピチャピチャと歩く。二・三メートルの高さの岩が次々に現われる。三点支持とかいうものを習つて、注意深く手足を動かして登つていく。小さなくぼみに足をかける。片足をのばしてひつかりを捜す。それからグイッとからだを引きあげる。スリル満点。実に面白い。もつとも多少こわくはあつたが・・・。途中滝の水を浴びて登るところもあつたが、ぬれることなど気にもならなかつた。

十一時半ごろ、お昼にした。適当なところに腰をおろして、皆お握りなどをほおばつてゐる。一年生がゐるときとはまた違つて、何かとても落ちついたような、のんびりしたやうな気持を味わつた。また歩き出して一時間とちよつとまわつたころ休憩。ここからは水も殆んど無いから靴をはきなさいといわれた。沢がもう少しで終りだと思つて残念で仕方がない。いままでわらじで水の中を歩いてきたのに、毛糸の靴下をはいて靴をはくなどというのはどうも気持が悪い。歩き出してしばらくすると水がなくなつた。そこから先はガレ場だ。ひどく石がもろくて危ないので途中か

ら沢をはなれた。やがて三の塔についた。去年はここに小屋があることにしろ、人が大勢いたことにしろ、しやくにさわつて仕方がなかつたのだが、今回は頂上にいる人に何だか親しみを感じたのは不思議である。富士山がよく見えた。三時頃、頂上を出て帰途についた。バスも電車もすべて順調にはこび、六時過ぎには下北沢についた。ゆつたりした気分の楽しい山行だつた。それにしても目沢さんや平沢さんを見てみると、心から自分の山を楽しんでおられる気がする。やはりオトナとコドモの違いだろうか？

## 山

星野敬子

もう夏山も終つた。何もかも無我夢中だつた。ただ夏山を成功させるため、新入部員を引つ張つていく為に。考えるなどという事はそれこそどこかに置いてきた。だがそれも終つた今では、やつと少し余裕が出て来たようである。そうなると、急に気になり出した事がある。「山は私にとつて、どのようなものなのであろうか」ということである。

山、それは自然の啓示である。力強く、大きく私を圧倒する。しかし、私はそれが好き

である。たまらないほど好きである。そして一生そうであつて欲しいと思つて。しかし、又決してそれにすべてを捧げてはならぬ。とも思う。何故・・・。

ジャン・コストの言葉に「僕は山に惚れこんでいるから、山だけで満足だ。」というのがあるが、私はそうはいかないのである。山に惚れこんではいるけれども、山だけでは満足出来ないものである。山に行かない人から見れば、そんなことはあたりまえに見えるかも知れない。だが私にとつて、非常に重大な事なのである。私は前から、ほんの短い間でもいい、自分の情熱をすべて傾けられるやうなものがあつたらどんなにすばらしいだろう。一

と思つて来た。そして、山というものを知つた時、これこそ、と思つた。しかし、こうしてやつて来た今、それにすべてを捧げてはならぬと言ふのは・・・。

山はそれに値しなかつたのだ。と言えはそれまでだが、私には、とてもそうは思えないのである。むしろ、始めより、ずつとずつとすばらしいものであることを知つた。あのやうに真実なもの。あのやうに力強いもの。又あのやうに美しいものが、他にあらうだろうか。しかし、私の心の中に、それでは済まな

い、空白のあることは確かであり、それこそ私の求めていたものかもしれない。だが、もしそれが見つかつた時に、今までの、山に對する考えが崩れてしまふようであつたらう。いや、そんなことはあり得ない。又、あつて欲しくない。

山は私にとつてあくまでも大切なものである。それがすべてではないとしても、今の私にとつては、何よりも大切なものである。とにかく、もつと山へ行くことだ。そうしてその上で考えて見ることだ。

## ○ 自然・山・人間・機械

### 風天抜作

山を愛し現代の機械文明を憎んでいた或る青年は、突然次のことを悟つた。

「自然がすべてのものを作り出した。宇宙・地球・山・川・海……果ては生物に至るまで。そして人間も……」

人間は理性によつて創造を始めた。単純な道具から発展して、現代におけるあらゆる機械を創造した。そしてこの複雑怪奇な社会を創造した。舗装された道路はあたかも自然を破壊していくかの如く山をぬい、自動車は排気ガスをまるで自

然を汚すかの様にあちこちにまき散らして行く。

しかしそれを作り出した人間はやはり自然の創造物ではないか。ビルも工場もそこから排出される有毒なガスも根本的には自然がそりさせたものに違いないのではないか！

そこで彼は機械の中に潜んでいる自然を見する為、新宿という世の中では最も自然的でないところに出かけた。彼はまず自動車の洪水に驚かされた。騒音が彼の耳をつんざく。無神経で無気力な人間の集まりが彼の回りをぞろぞろ通り過ぎていく。彼はいいようもないいらだたしさに陥つた。嫌悪である。彼はそこに自然の美しさの塊も見いだすことができなかつた。

こんどは山に登ることにした。高い電車賃とバス代を払つて登山口に着いた。「ア、アツ」山の空気は彼の心を清らかなものとさせた。彼は一路頂上へとめざした。険しい登りを自分と闘いながら頑張りやつと頂上に着いた。すでに日は沈みかかつていた。しかし夕やけの空にくつきり浮き出た南アルプスの稜線！彼はしばし我を忘れて感激に浸つた。

先程悟つたことは理屈にすぎないと考えた。やはり機械は自分の敵であると思つた。

ふと気がついてみると、彼はザツクから鐘詰を取り出してバクついていた。彼は「はてな？」と考へて、その鐘詰をみていた。それは○食品株式会社の製品であつた。

自らあれ程嫌悪しあれ程軽蔑していた機械の産物に相違なかつた。彼は目を今きた道の方へ移した。彼があえいできて自分の力で登つたと思つていたこの道も、考へてみれば他人の力によつて木を倒し草をむしつた自然を犯した道である様に思へた。これもやはり人間の産物に違ひがなかつた。彼はいつのまにか自分の意志の中に自然の敵である機械や人間が入り込んでくるのに気づいた。彼は何故か自分の考へていることにひどく矛盾を感じずにはいられなかつた。彼の頭は明らかに混乱していた。すべてが不可解なものに見えてきたのだ。彼は再び南アルプスを眺めた。南アルプスの山容はやはり彼の心をひきつけずにはおかなかつた。

### 「あとがき」

右の文は非常に短時間で書かれたものだ。故に偶然性の方を強調したもので

必然的に生まれてくる深い哲学・倫理・思想等といったものは取り扱っていない。非論理的な文章になつてゐるのはその為である。

最後に、人間はやはり根本的に矛盾した動物だと考える。

九月二八日 午前四時三四分

### ○三年間で感じたこと

伊藤義和

「山でうれしいこと」

・頂上に登つた時・・・汗ぐつしよりになつた体を、なんとも言えない風がそつといやしサブリーダーの目が集中してゐるのではない。みんなの顔は恋人でも得たかのよかと思つたとき・・・

・出発の時、みんなより早くバックができたとき・・・心のゆとりができて、なんとなく今日はすべてうまく行くような気がする。

・リーダーの休みの声がかつた瞬間・・・きれいな峰だが、いざ登つてみるとゴミかきまらで地獄で仏とでも言おうか。パテてゐるんづめのカンでいつばいだつたりすることがある。大変興ざめである。

・幕営地でその日登つた山が夕やけにたざれてゐる時・・・ほどよい体の疲労感と相まつて、つくづく平和な一瞬を感じる時である。

「XX打ち」が順調な時・・・体が調子のいい事を知るとともにこれからのファイトが沸く時である。

「山でいやなこと」

・頂上であまりの景色が見えない時・・・せつかく苦勞して登つたのに、全くがつかりする。特に下級生の部員が、つまらなそうな顔をしてゐると、自分が悪いのでもないのだが、手をついてあやまりたいような時もある。

・先発の時自分のバックが遅れた時・・・

・リーダーの「ザックをしょええ」と言う声のかかつたとき・・・休みの短かさを感じ、改めて荷物の重さを考えるときである。

・速くから見ると

ある。大変興ざめである。



### ○女子の山行に

考えること

高木彰子

私がワングルにはいつたのは、部室のフンイキにひかれたからであつた。何の気なしにはいつて、言われるままに山行に参加し、トレイニングに出た。女子のいなかつた上級生達が女子の私達の扱いに気をつかつてくださつていた事など、まだよくわからなかつた。一番男女の区別がはつきりしたのはスキー合宿の時。男子は雪の上で幕営なのに女子は民宿だつた。そして翌年の春山。勿論連れてつてくれるはずはない。

二年になつて一年生の面倒を見るためになつた。何をすることもおつかなかつた。一番気を使つたことは、一年生をできるだけ多く、ワングルに残すことだつた。きびしいことなんてとてもできない。一年生がやるなんていいでしたら大変だから。もともとそんなにきびしい事ができる程の実力なんて私達にはなかつたが。結局私達が山行をやる時に考えたことは、無事に、楽しく、できる限り自分の力ですることだつた。登山は制限を求め、それをおしひろげていくものだ、という考え方があつた。しかし私達の山行にはそ

んものではなく、まず低い所を自分達の力の範囲内で、確実にこえていく、ということであった。

「山登りやら夏山がおわり、二年目も半ば、という所である。まだここ当分は基礎がたぬの時であろう。それには地道に一つ一つの山行を積み重ねていくしかない。無理に背のびをしないことだ。男子は男子で活発にやっているが、女子は男子の真似をしてはいけない。女子には女子の素晴らしい山登りがあるはずだ。それがどういふものかは、まだはつきりとはわからないが。」

女子の場合、男子とちがつて社会的制約が大きい。家庭では大変心配する。高校のクラブ活動で、山登りの特殊な技術をおぼえること、たとえば岩登りだとか、雪上技術等は、女子の場合必要ないと思う。それよりも目ざした山を自分達の力で、確実に、安全に、きちんと登れるようなクラブ活動であつてほしいと思う。「山登りは体力のある人にしかできないもの」では決してない。普通の体力のある人ならば誰でも山登りはできる。そしてやり方次第では素晴らしいものになる。そんなすばらしい山行をやつてほしい。それは普通の体力の持ち主ならだれでもできるが、決して

て簡単ではない。体力的にはきびしくないかもしれないが、本当に満足した山行をするのは並大抵ではない。山行の間、私達の全生活がそこにあるのである。全生活を自分達だけの力でやらなければならぬのだから、ポーションとしてはできない。

ワンゲルの活動のもう一つの大切なものにはない。体力をつけることも勿論大切だが一緒に山へいく時、仲間や、上級生をしらないで行くことはできない。よつほどの事がな

い限りトレーニングは休むべきではない。結局、登りたい山に安全、確実にみんなを登つてほしい。ということだ。部員が一人も欠けることなく、みんな登るのである。ここ当分はそうしてしつかりした実績をあげてほしい。



「岳友は財産である」

四期 田中将利

山へ登る動機は人それぞれによつていろいろあると思う。しかしその底流の中には、未知に対する憧憬、換言すれば、より美しく、

きがあることは否めない。その心こそ人間のみに与えられた特権ではあるまいか。

山登りは一人でも出来る。しかし未知を求めんとするには、我々の普段の生活環境とは全く異なる未知の条件が伏していないとは云い切れないのである。それは自然条件であり又人為条件である。自然条件とは、高低、気温、乾湿、風向、風力、地形等々であり、人為条件とは個人の体力、体調、判断力、装備食糧、燃料等である。一方山登りが未知に対する求道であるならスポーツ登山と云つても過言ではない。スポーツとしての登山ならば、奇を求めてはならないし、又生きていて初めて未知に対する飽くなき前進が可能なのである。

それ故に只一度の過失、錯誤も許されたい極めて厳しいスポーツと云うことが出来る。これは他のスポーツの如く人間尙志の戦いと

は全く相違する。

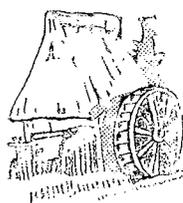
もう一度くり返す。たゞの一度、たつたの一瞬の判断の錯誤・過失も又虚栄や外面や、若い人になりがちな「ハネアガリ」も許されない。そこには自己を正視正覚する「意志」と「認識」あるのみである。

……たゞ如く山登りの条件とは、自然条件と人為条件である。その内自然的条件は、只「そこにある」のみであつて、その分析、正視以外にない。しかし人為条件の方は我々の方で創造し得る可能性が残されて居る。完成せる個人が無いことは云う迄もないが、自己を正しく判断することの出来得る複数の人間が協力することにより、一個人の力をしのぐ戦斗力、防衛力が生ずることは可能である。この様な意趣を持つた個々が合体した時、そこにパーティ（集団）が生れ、その集団が学校等を基盤とするならば山岳部と呼ぶ。が、一度生れた集団は、個々の集合体でありながら、それは既に一個の有機体としての力を持つ。それが組織でありパーティである。彼は最早、一人の人間が判断し、活動する如く、判断し活動しなければならぬ。個々の力の合計力よりも、プラスがなければ集団としての意味がないのは勿論である。そして学校山

岳部は、常に若く年令をとらない。云うまでもなく年毎に、卒業生を送り、未経験の新人を迎えるからである。学校が存在し、山登に憧れる生徒が無くならない限り山岳部は息吹き、考え、育たねばならない。それは組織された有機体として息吹く以上、彼自身もたゞの一度も過ちを犯すことは許されないのである。そこには彼を中心として、学校―父兄―OB会のライン。彼の中にリーダー―線部員―新人のラインがあり、各学年毎に横のスタッフがある。このラインとスタッフこそは厳然とした愛情と云う接着剤によつて強固に、そして無限の基盤の目の如く結着して初めて集団の効果を生ずるのである。

そしてその集団こそ、感受性の強い多感な有為な年令の学生を、孤独のオリの中に投げ込んでいる今の受験本位の学制に抗し、大風呂敷的に云うならば日本の本當の将来をリードするエリート達に、人間味あふれる（独善的でなく犠牲と協調を理解出来る）友達を作らしめる唯一のものと思ふのである。その厳しい山登りの中でこそ、虚栄や、「テライ」のない心の友を作ることが出来るのではないか。この友こそ真の友でなくてなんであるう。斯く云う私も二十年間の山登りを通じ厳しすぎ

る程厳しく、鬼の如く感じた先輩を持ち、又私自身に対する厳しさに協力してくれた同輩、後輩を数多く作ることが出来た。この先輩、同輩、後輩なくして何の友人ぞ。私は世間並の金力も権威もないが、私は世の中を胸を張つて歩む。我岳友こそ私の貴重な、そして何者にも換えることの出来ない、何者にもうばうことの出来ない財産であると。!!



\* 部員名簿・西朋登高會員名簿 \*

顧問

石井 学 杉並区善福寺三上一〇一九(三九〇)三九三七  
 尾形 良助 同 大宮前六一三四三晴風荘(三九二)二八五四  
 小林 隆一 同 永福町七四(三二二)一〇八八  
 勝嶋 利男 府中市是政六一二七一(四三)六三二二五  
 間野 典彦 板橋区小豆沢二二三一(小豆沢住宅二二一)号

三年部員

伊藤 義和 武蔵野市吉祥寺南町五一八一(四三三)〇九〇七三  
 山崎 恒 北多摩郡保谷町本町三一六一二四  
 岡田 徹 杉並区本天沼三一二六一五(三九六)〇九一二  
 小川 秀策 同 清水一八一一〇(三九二)一六七三  
 平野 誠 同 天沼一八二八(三九二)四六六四  
 山野 裕 世田谷区祖師谷二一三六(四一五)二七六一  
 高木 彰子 武蔵野市吉祥寺本町四二四一九  
 井口みどり 杉並区大宮前五二二四(三九二)四八七〇  
 佐久間令子 同 久我山一一二八二(三九二)八六二五  
 西村 陽子 三鷹市井之頭三一五一五

二年部員

八島 久男 杉並区久我山三一二〇三(三九八)九三八四  
 中尾 成邦 同 永福町三〇四(三二八)五六四一

石橋 康利 杉並区本天沼二四七二三(三九〇)〇六五一  
 菊池 治男 同 下井草一一二三一(三九九)七〇六六  
 永井 祥一 同 本天沼三一四一一二(三九九)〇六三一  
 早瀬 久起 同 松庵北町一三九(三九二)五〇一六  
 山本 泉 同 善福寺一一七一(三九九)八四六一  
 中井 早苗 同 下高井戸一六四(三二二)七一五  
 星野 敬子 同 清水三一三二(三九六)二七〇二  
 稲葉 光子 同 上高井戸三一八八五(三九二)二六〇三  
 羽柴 春夷 同 和泉町二六八(三二八)六〇一七  
 岩井 祥子 武蔵野市緑町二四一一(三〇五)  
 三枝みのり 中野区松ヶ丘一一一(三八九)〇九七一

一年部員

荒木 茂 杉並区西高井戸一一九六(三九八)九四八八  
 伊庭 英夫 同 上高井戸四一八二四(三二二)一六九四  
 中村 正俊 同 成宗二一八二二(三七〇)〇〇四七  
 長谷川 誠 同 下井草三一三三七(三七〇)〇〇四七  
 早瀬 友秋 同 松庵北町一三九(三九二)五〇一六  
 水口 泰介 同 阿佐谷北一一三一(三一)一四二六  
 山本 太一 同 下井草五一三三(三九〇)六二六八  
 渡辺 喜仁 同 阿佐谷北五一九一(三八七)二六三五  
 古谷 和夫 中野区城山町五五(三六九)〇〇三一  
 松谷 恭司 同 昭和通り二二二五(三六二)一四五九  
 和地 優 同 高根町一六(三六八)七六二八  
 伊東 伸作 北多摩郡久留米町ひばりヶ丘団地一六八一(二〇六)

岡入 慶一 三鷹市牟礼一六三九(〇四二二) (四三) 七〇七三  
 勝俣 正昭 調布市小島町四四四(〇四二四) (八二) 五三九〇  
 相沢 正美 三鷹市下連雀二一七(〇四二二) (四三) 〇九八一  
 長嶋 裕子 国分寺市戸倉新田三二三  
 藤田 明子 武蔵野市吉祥寺南町五一四一四  
 山田 優子 同 西久保一丁三七一四  
 松島世志子 八王子市寺町二五  
 入野まゆみ 杉並区高円寺南二一七一一五

西朋登高会

特別会員

都筑 修一 長野県松平市女鳥羽町四六三  
 鳥山 榛名 目黒区上目黒五一二四二五  
 中村 淳 世田谷区代沢二一二五二〇(四二一) 一九七四  
 岩井富士雄 台東区浅草桂町三一二(八五一) 一九〇八  
 布施千恵子 千葉市稲毛町二ノ四  
 篠崎 武 西多摩郡日ノ出村大久野一七二三(五日市) 一九七  
 普通会員  
 林 春彦 江戸川区北小岩五一二八一三(六五七) 七五五五  
 南波 貞敏 国分寺市南町二一〇一三  
 長崎 正躬 藤沢市片瀬二九一六  
 出川 将利 中野区大和町三一三二一 (三八五) 一二二七

田中 実 港区麻布竹谷町一 (四五二) 三六五七  
 平沢 勇 杉並区天沼二一一二 (三九二) 三六一三  
 笹田 英次 中野区仲町一三  
 鈴木 輝夫 大阪府池田市荘園二一六一三  
 山口 雄弘 武蔵野市吉祥寺本町二一四一二七  
 佐藤 信治 八王子市本郷町二〇(〇四二六) (二) 一一三六  
 松田 朝夫 大阪府豊中市本町九一五九花蝶団地二二  
 町田 明 杉並区下井草四一〇一二〇(三九〇) 三二一七  
 里見 朝規 杉並区天沼三一六〇四  
 渡辺 享 同 三一七三六  
 目沢 民雄 渋谷区千駄谷五一一三  
 成瀬 泰雄 文京区西片二一八一七  
 加藤 鈴夫 杉並区永福町四七  
 鈴木 潤 同 下高井戸四一九四七 (三一二) 二七九一  
 岩崎 元子 同 大宮前二一七一二 (三九二) 九七五二  
 亀山 敏子 武蔵野市吉祥寺二七六九  
 伊藤 弘美 杉並区高円寺六一七五四  
 岩波 康之 葛飾区小谷野町三〇三  
 米野 弘躬 豊島区池袋二一六九二本郷方  
 小田 尚於 札幌市南条西二一旭ヶ丘一三アバト四〇二号  
 林 武志 武蔵野市吉祥寺東町一一一一七  
 川口 和雄 川崎市百合ヶ丘一一九一七  
 松田 稔 杉並区神明町九三 (三九二) 一二九六  
 黒沢 隆 藤沢市大鋸藤沢団地三八一一二〇二  
 橋本鋼太郎 練馬区立野町九〇九 (九二〇) 四二

田中 康弘	中野区大和町三三二一 (三八五) 一二二七
沢野 徹	同 宮園通り五十七 (三八一) 〇六三六
関谷 興雄	武蔵野市境南町一八四
小川 健吾	杉並区上高井戸三十八五七 (三九八) 〇〇一三
梶内 俊夫	中野区上鷺宮一十九一七 (九九〇) 七六五八
川田 秀明	杉並区上高井戸五十二一九七 (三九二) 一八二二
橋本 章	神奈川県平塚市中里八二〇日本ソノダ平塚寮
野原 光	杉並区善福寺四二一八 (三九九) 〇六七八
坂垣乙未生	同 井荻二一六〇 (三九〇) 六三九四
山本 省治	同 高円寺七一九二一 (三一二) 二四三九
小津 亮介	千葉県船橋市大穴町六六五
福田 善明	杉並区永福町二六 (三二八) 七二四三
平木 桂太	同 荻窪二一九六 (三九一) 二八九七
上遠 野清	同 今川二一四一六 (三九九) 四〇九七
秋山 泰夫	同 荻窪二一七三 (三九一) 五八六七
三浦 等	中野区新井町一三三 (三八六) 二〇五四
梅原 伸二	杉並区西荻窪二一〇七 (三九〇) 六三六三
宮武 義照	武蔵野市関前三一八一二
尾崎 純理	練馬区練馬三一七一一 (九九一) 四二七九

一九六六年一〇月八日  
発行所

東京都杉並区大宮前三一二三  
東京都立西高等学校

ワンダーフォーゲル部  
編集責任者 八島久男

1966. 10. 8

# 訂 正

ページ	段	誤	正
2	2	新 生	新 入 生
3	3	梶 間	梶 内
5	2	PL-スープ	カレー-スープ
9	2	注 二	注 三
17	2	競 争	競 走
29	1	測 量 の二めか	測 量 のためか
21	3	(追加)	石 樽 記
32	1	御 大 から	御 大 将 から
	〃	独 白	独 自
35	2	ファイトが沸く	ファイトが湧く
	3	勿 論	勿 論
38	2	2-822 (中村正俊)	2-877
39	2	38-1102 (黒沢隆)	38-202
追 加			
38	1	高 木 彰 子	(0422) (22) 6688
	〃	西 村 陽 子	(0422) (44) 3520
	〃	山 崎 恒 子	(0424) (61) 7158
	2	山 岩 井 祥 子	(0422) (52) 0763
	〃	伊 長 東 伸 作 子	(0424) (62) 6515
39	1	長 嶋 裕 子	(0423) (22) 1049
	〃	藤 田 明 子	(0422) (43) 1320
	〃	山 田 優 子	(0422) (51) 2260
	〃	入 戸 野 まゆみ	(312) 4920
	2	山 口 雄 弘	(0422) (2) 7902
	〃	松 田 朝 夫	(豊中) (53) 2710 [呼]
	〃	林 武 志	(0422) (22) 5475
40	1	橋 本 章 治	(平塚) (22) 1410
	〃	今 井 義 治	新・下落合 1-294 RA12 1951) 9769